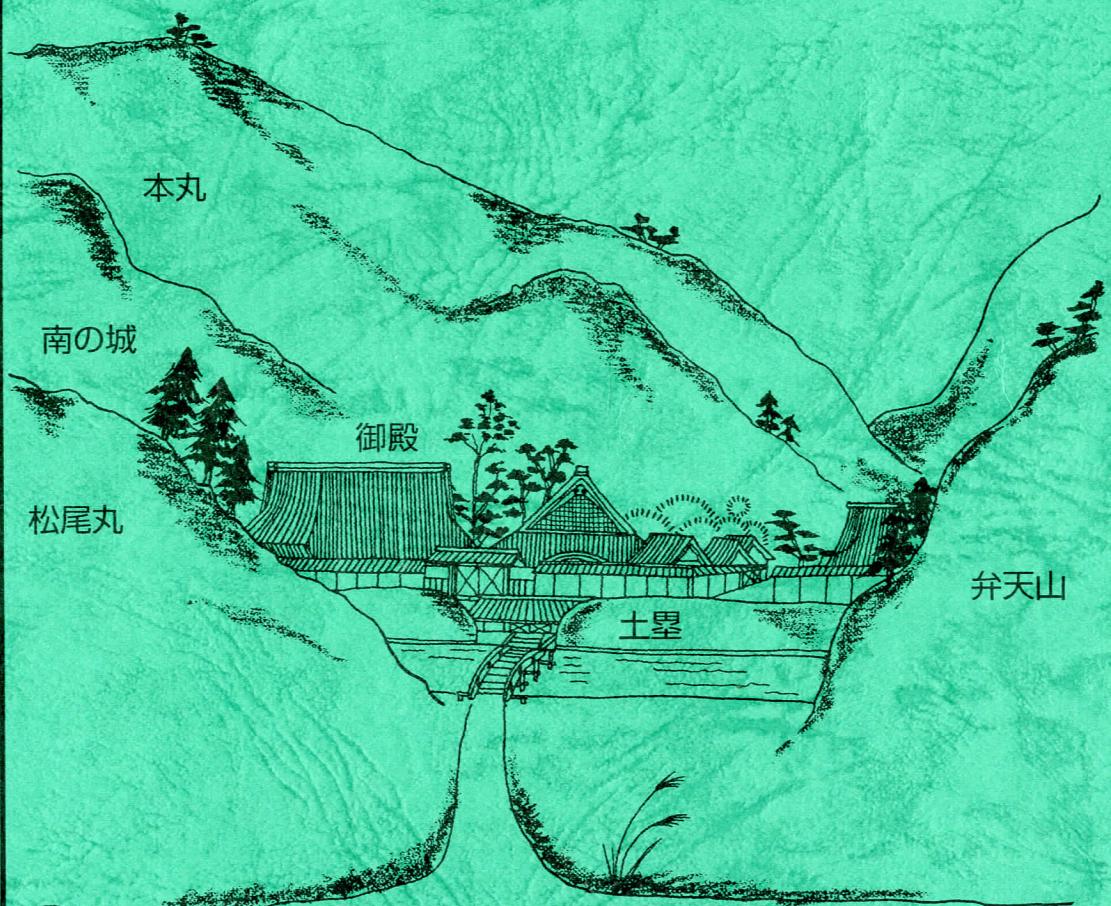


佐土原町文化財報告書第6集

# 佐土原城址概要報告書 I



1991.3

宮崎県佐土原町  
佐土原町教育委員会

## 序

佐土原城は、鎌倉時代に源頼朝によって地頭職として派遣された工藤氏が豪族となり、統治したのが始まりといわれています。その後、伊東と姓を改め、南北朝動乱前後の緊張した状況の中で山城も造られたようで、戦国期には伊東氏の中心的な城郭であり、城下も経済・文化が大いに進展し華やかな時代であったようです。

天正5年（1577）伊東義祐は島津義久に倒され、島津に実権も移りましたが、1600年の関ヶ原の合戦で島津氏も敗れ、この地も徳川直轄地となりました。この間、山城は何度も修復されたようです。今後、発掘調査を進める中でおおい判明されていくと思われますが、現在遺されている山城の遺構は1600年頃のものと思われます。

慶長8年（1603）、家康の命によって垂水領主島津以久が佐土原3万石の城主に封ぜられ、佐土原島津藩主の祖となりました。その後、2代忠興が山城の城郭から山の下に御殿に居住したもので、以後明治2年（1869）に広瀬に転城されるまで佐土原城は歴史の舞台に立っていました。

このように佐土原城は、伊東氏の山城と島津氏の平野部との城が時の流れにそって残っています。

発掘調査した平野部については報告書のとおり、また、山城についても遺構がきわめてすばらしく保存されていて、それと同時に歴史的な景観である町割、寺社、街道などがほぼ江戸期のまま残されており、佐土原城を中心とした城下町としての文化的価値はきわめて高いと思われます。

今回の報告書は、佐土原城址第1次発掘調査を中心に報告致しました。

この調査に当たり、県教育委員会のご指導ご援助、さらに土地所有者の皆様はじめ調査員、町民の皆様のご理解とご協力に対し厚くお礼申し上げます。

平成3年3月

佐土原町教育委員会 教育長 小野 勝

## 例　　言

1. 本書は、佐土原町合併30周年記念事業としてスタートした佐土原城址公園整備計画から現在に至る経過報告とともに、その中で実施した第1次城址発掘調査の報告書である。

2. 城址の発掘調査は、次の期間実施した。

試掘調査 平成元年2月7日～平成元年3月22日

第1次発掘調査 平成元年10月31日～平成2年3月31日

第2次発掘調査 平成2年6月15日～平成2年10月31日

3. 調査関係者は次のとおりである。

調査主体 佐土原町教育委員会

小野　勝（教育長）

寺坂　正紘（社会教育課長）

斎藤　成實（同　課長補佐）

庶務担当 関屋　文子（同　主幹）

調査担当 木村　明史（同　主事）

4. 発掘調査の出土遺物について、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）に又、「遺跡の位置と環境」については青山幹雄氏（佐土原町郷土史同好会）に御教示いただいた。記して感謝したい。

5. 調査報告書第2章「佐土原城址レポート」及び、「山城縄張図」は、八巻孝夫氏（中世城郭研究会幹事）の執筆による。

6. 本報告の方位は磁北である。またレベルは海拔絶対高である。

7. 出土遺物は、佐土原町教育委員会で保管している。

8. 本書の作成、執筆は斎藤・木村の協議のもとに行った。

## 目 次

序 文

例 言

第1章 蘇る佐土原城址 1~18

1. 調査に至る経緯 1
2. 遺跡の位置と環境 3  
(—城をとりまく寺院について—)
3. 町文化財の指定 7
4. 佐土原城址の歴史的背景 12  
(—特に学史的視点から—)

第2章 調査の概要 19~33

1. 佐土原城址調査レポート・八巻孝夫 19  
佐土原城の山城遺構を中心には
2. 居館部第1次発掘調査 28  
  1. 遺構 28
  2. 遺物 28
  3. まとめ 30

第3章 佐土原城址の活用 34~37

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の寺院 5

第2図 佐土原城址位置図 6

第3図 山城縄張り図 26~27

第4図 柱穴模式図 28

第5図 第1次佐土原城址遺物実測図 29

第6図 調査区設定図 31

第7図 佐土原城址遺構平面図(航空測量) 32~33

第8図 発掘遺構に基づく復元想像図 36

第9図 佐土原城址歴史資料館復元想像図 37

## 図 版 目 次

図版1. 佐土原城址の全景写真

図版2. 山城遺構写真

図版3. 第1次発掘調査の全景写真

図版4. 同上遺構写真

図版5. 出土遺構写真

図版6. 出土遺物写真

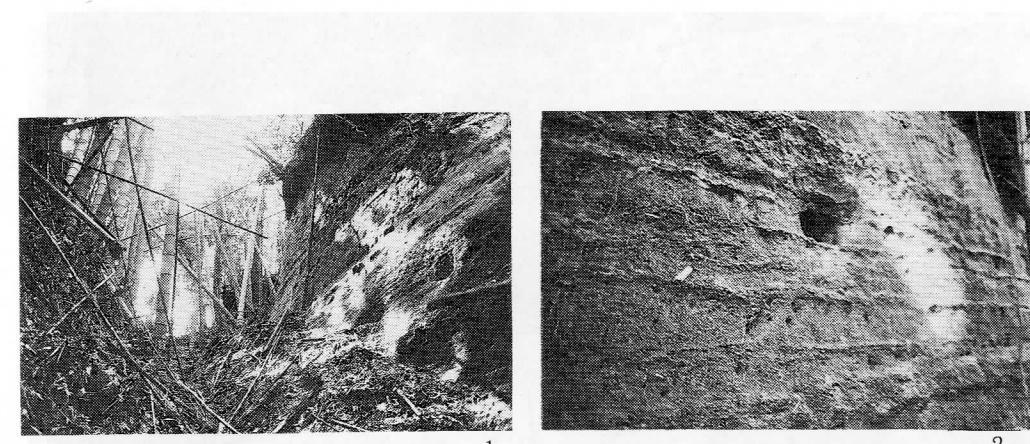
図版7. 天正年中佐土原城図

図版 1



佐土原城の全景

図版 2

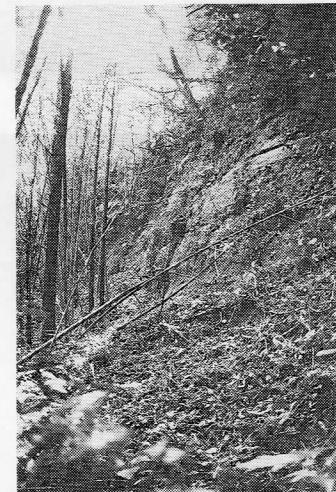


1

2



3

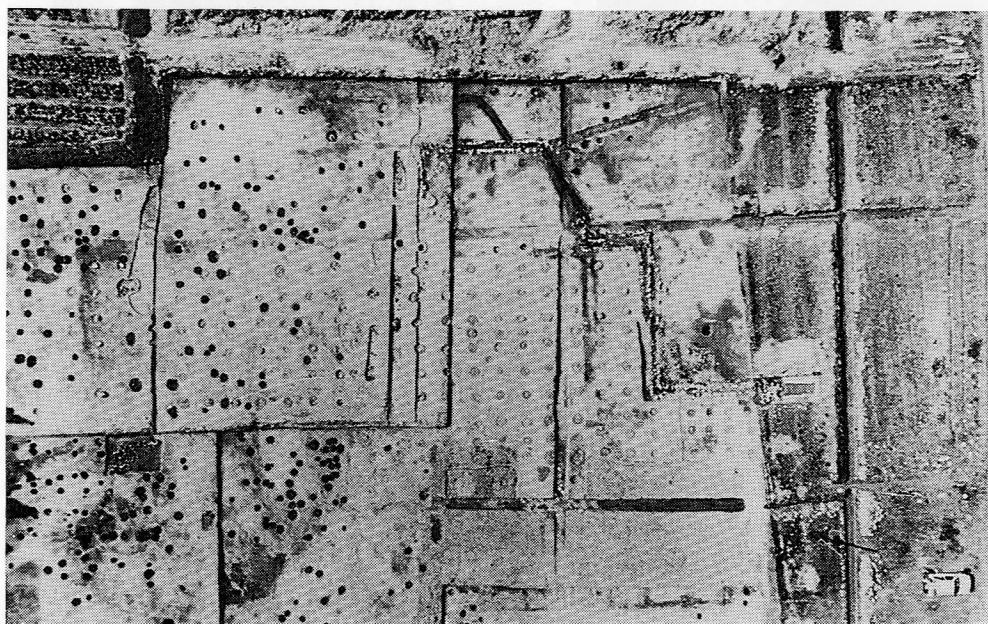
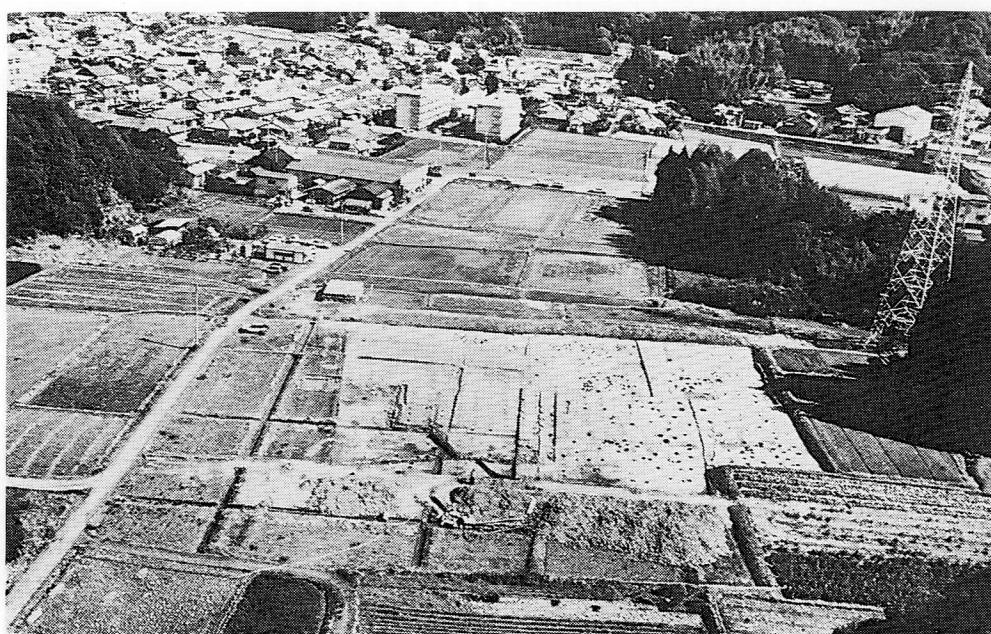


4

1. 山門を下から望む。
2. 山門ほぞ穴
3. 大手道
4. 本丸を下から望む。

山城遺構

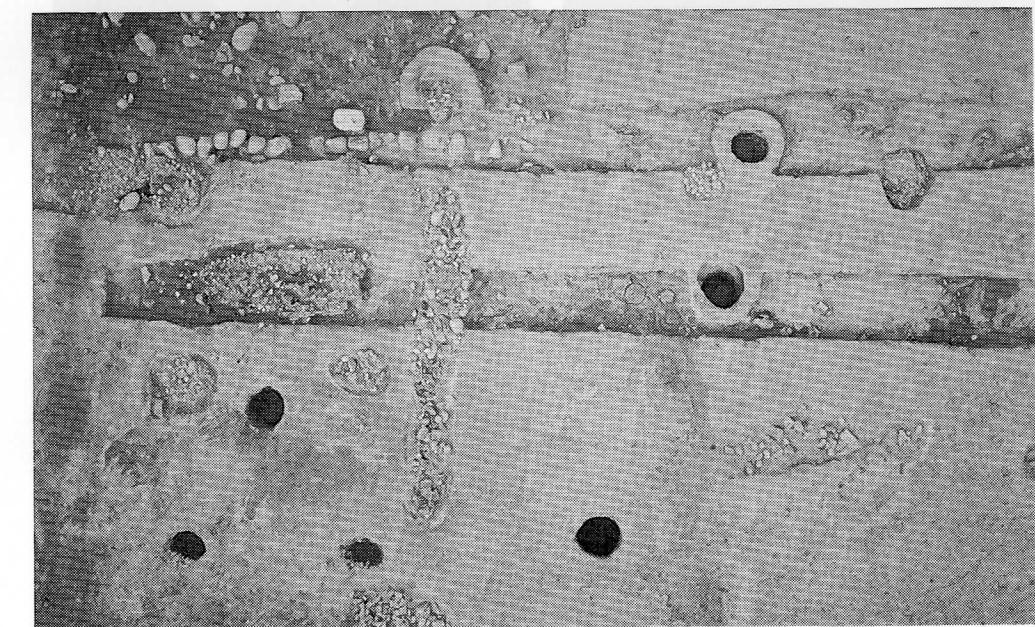
図版 3



上：北西から  
下：真上から

第一次発掘調査の全景

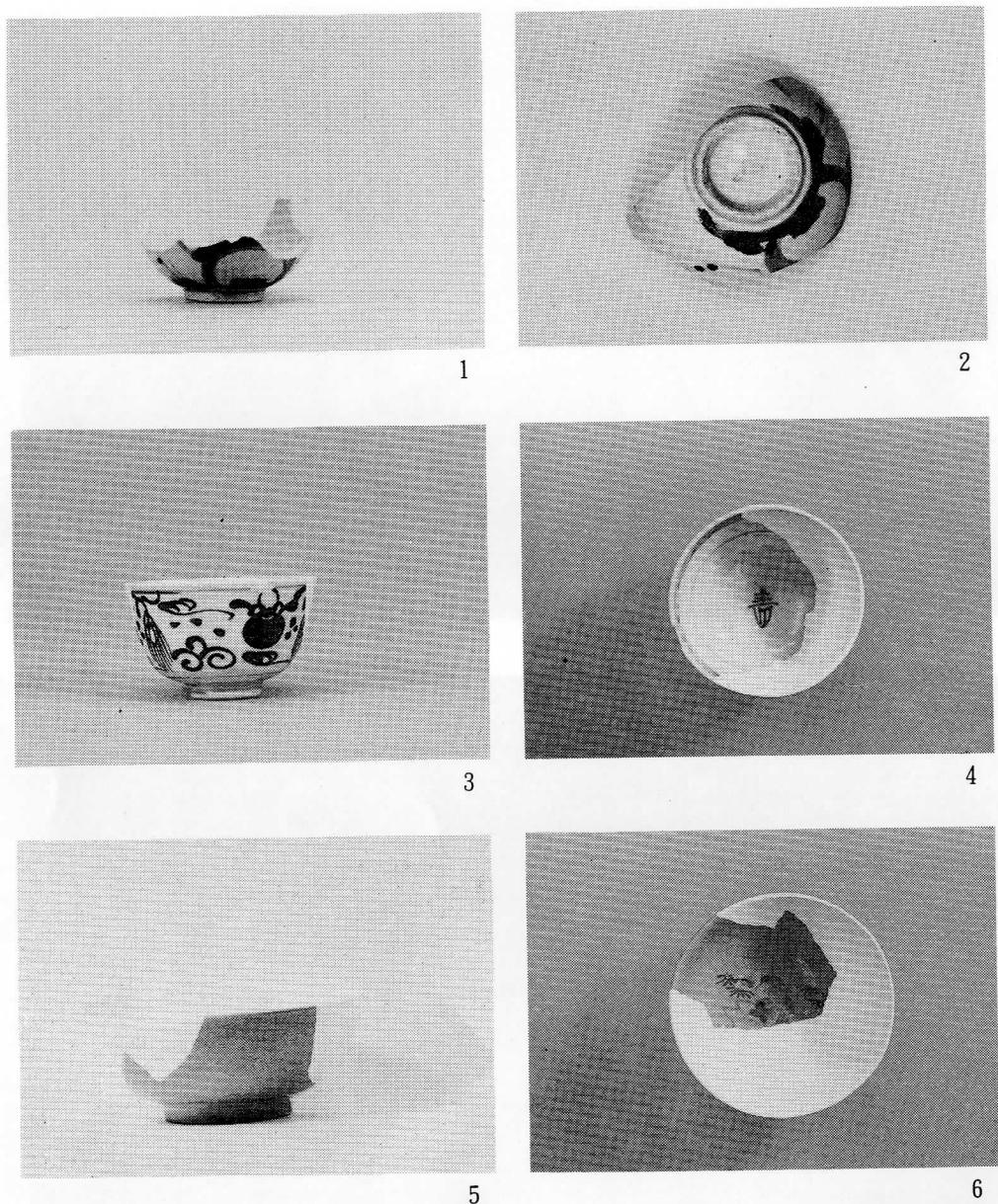
図版 4



上：暗渠  
下：瓦落ち

第一次発掘調査の遺構

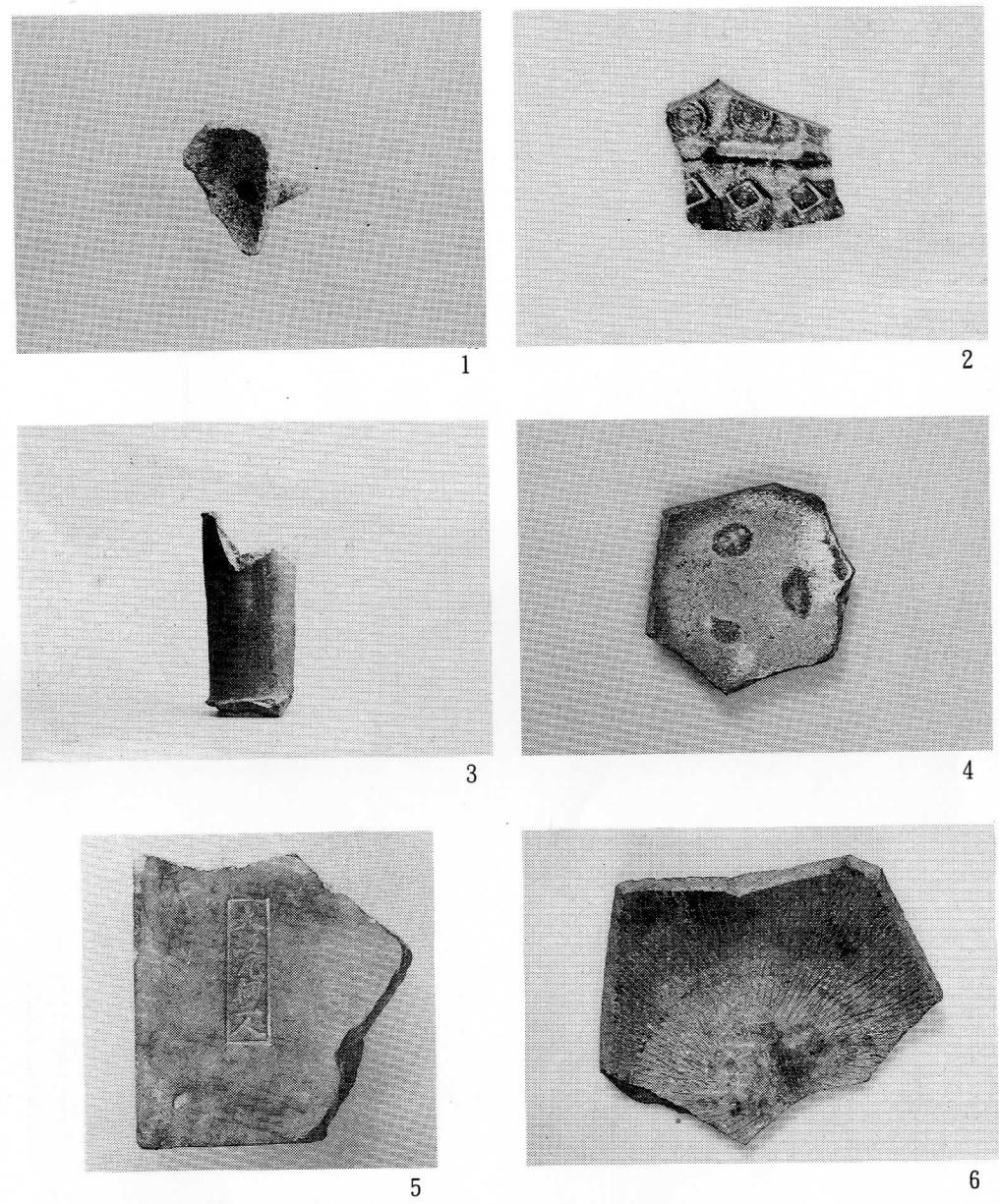
図版 5



1. 2. 肥前系の染付碗 (第5図・3)  
3. 4. 濑戸・美濃の染付碗 (第5図・2)  
5. 6 京焼風陶器 (第5図・1)

第一次発掘調査出土遺物

図版 6



1. 薩摩焼・土ビン類の脚  
2. 肥前陶器・印花文  
3. 在地の陶器  
4. 肥前陶器の皿 (第5図・4)  
5. 瓦 (刻印・大阪瓦細工人)  
6. 捣鉢 (堺あるいは備前系)

第一次発掘調査出土遺物

## 第 1 章

# 蘇る佐土原城址

# 蘇る佐土原城址

## 1. 調査に至る経緯

佐土原町では、昭和60年に合併30周年記念行事として、佐土原城址公園整備並びに歴史資料館を建設することになり、その基本方針に、「この計画地は佐土原城の歴史を留める貴重な区域であり、町民の憩いの場として、計画するものである。」として本丸、南の城、松尾丸に多目的広場・児童公園・アスレチック広場等、平野部には鉄筋コンクリートの歴史資料館・駐車場を設け、利用度の高い公園を目指していたものであるが、宮崎県文化課から「佐土原城址については大切な文化財であり、遺構調査を完全に把握したうえで実施計画を作成し遺構が破壊されることのないよう………」との指導を受けた。

町ではこれを受け、資料館建設予定地の発掘調査を手掛けることに決定し、山城遺構調査については、東京在住の中世城郭研究会幹事の八巻孝夫氏に依頼することになり、町の公園計画も一時中断となった。

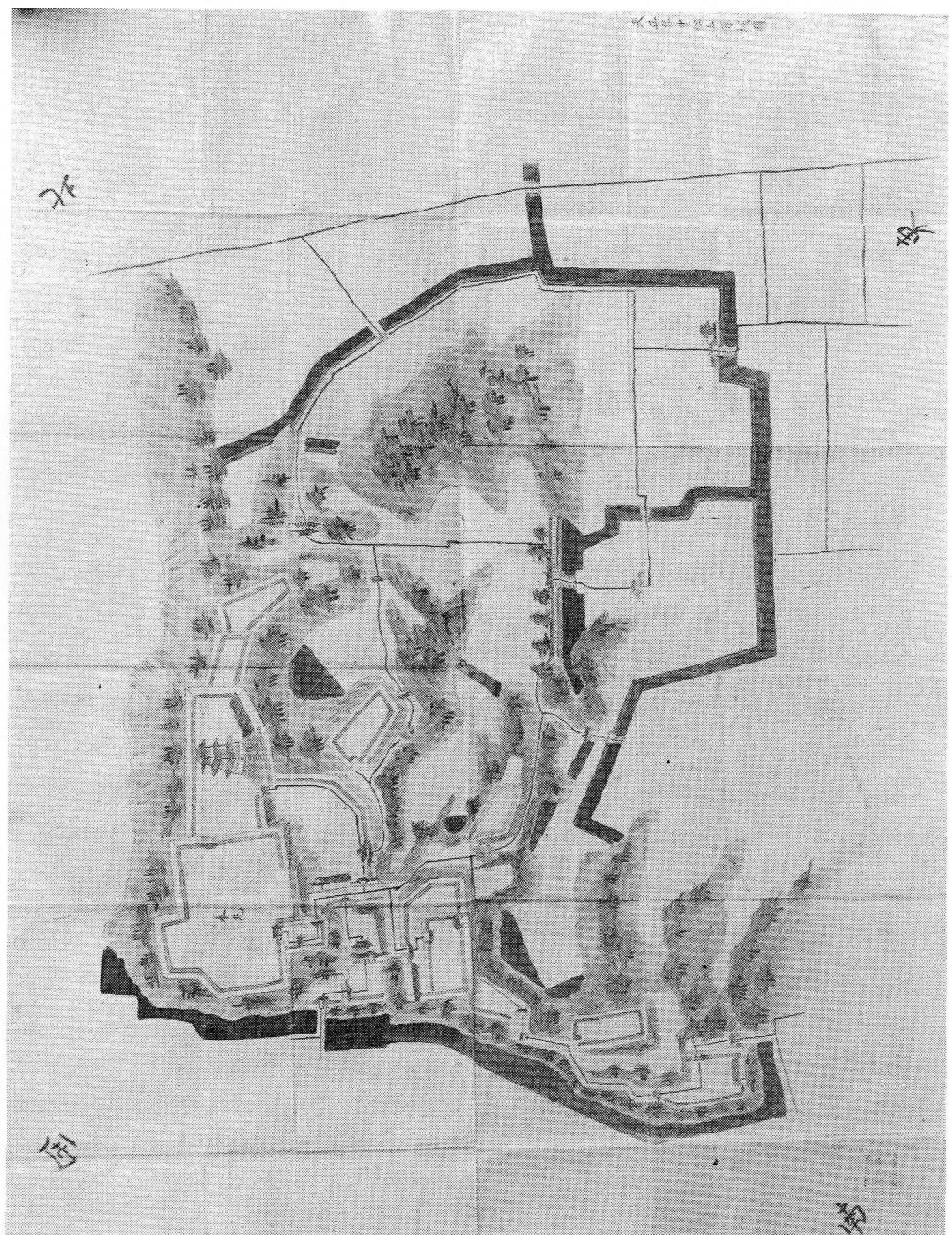
平成元年1月21日から2月5日にかけて、同氏に山城縄張り調査を実施してもらった結果、「佐土原町上田島地区は古くから佐土原城を中心とした城下町として栄え、高級武士の住居や商家の古い町並みや歴史的に貴重な遺構が数多く点在している。特に佐土原城址においては、その規模は中の大であり遺構（登城道・曲輪・拠型・堀切・縦堀等）の保存状態は極めて良好と認められ、地形等の崩壊もなく、歴史的に貴重な山城として高い評価を受けるものと考えられる。」との調査報告を受けた。（第2章1参照）また、資料館建設予定地にあっては、平成元年2月から3月にかけて遺構試掘調査を実施した結果堀や柱の礎石を発見、同年11月から本調査を開始したものである。

本調査は第1次調査として、「天正年中佐土原城図（日高次吉氏蔵）」から勘案し3000m<sup>2</sup>を発掘した。

この調査では、「大広間」「書院」「数奇屋」「倉庫」「番所」など約五百の柱跡や柱を支える礎石及び、「木製と石製の排水溝」「井戸の跡」の遺構が現れた。また、「肥前陶器」「京焼風陶器」「瀬戸美濃の陶器」「関西系陶器」「薩摩焼」、そのほか大坂職人の刻印のある瓦など約五千点にものぼる遺物が出土した。これらの遺物からは当時、中部地方や関西圏との交流があったことが偲ばれる。

第2次発掘調査は平成2年6月から始められ「上御門」や一直線に並ぶ堀の礎石が現れ、同年11月に現地説明会を行った。遺構や出土遺物については現在整理中であり、その結果は次回に報告したい。

図版 7



天正年中佐土原城図

## 2. 遺跡の位置と環境

### —城をとりまく寺院について—

佐土原城は国道219号と県道佐土原・広瀬線の合流する付近にある。北に1.5km進むと、一つ瀬川の沿岸に出る。城は、仲間原台地が開析された独立丘陵を利用して造られ、城下は、馬蹄形に巡らされた丘陵の中に位置する。この地は、一つ瀬川が北に面し、その川が日向灘に接したところに福島港を開いていた。そのため交易が盛んになり、関東や関西の物産が多く流入し、江戸期においては九州でも最も栄えた町の一つであった。また城下は、武士の住む屋敷町と町人の住む町人町に分かれていた。町人町では、佐土原歌舞伎（大阪系）や佐土原人形（薩摩系）といった独自の文化を生むなど佐土原は、日向地方の一大拠点に発展したのである。以下ここでは、佐土原城とその周辺の一端に“城と寺”的テーマで迫ってみたい。

城といつても様々な型・性質がある。一般的にいって佐土原城の場合は、寛永2年(1625)島津忠興が山上の城館を山下の居館に移すまでを山城（単位として独立した山に築城され、内容は山頂の平坦部を中心にして段状に曲輪が形成されたもの）と呼び、以後は平城（平地におかれ縄張面で、輪郭式、円郭式の城）といわれる。またこの城には、付属施設が配置されている。それは、出城・支城・境目の城・繫の城・伝えの城・枝城・端城・対の城・附城・詰の城・番城・陣城・陣所などで、佐土原城に関連する城として『日向地誌』『日向記』に古城・広瀬城・南岳原城・嶺ヶ城・諏訪城・中の城・端ノ城・西ノ城の記載がある。この中で城の性格が確認できているものは、諏訪城（伊東氏48城の一城）、（広瀬城（明治2年10月1日の転城発令により移動を開始したが、実際、明治4年7月15日の廃藩置県までの短期間の城構えであった）の2城である。その他は支城関係の城と思われるが、今のところはっきりした所在と性格はつかめていない。この手ががりとなるのは、街道と海路及び寺院の配置である。海路として前述の福島港がある。街道においては、高鍋往還、薩摩往還、飫肥往還、肥後往還、米良往還が日向の結節点にあり、この地が中世から近世にかけて日向における重要な役割を担っていたことが伺われる。また城の周辺ではよくお寺を見かけるが、城とはどのような結びつきがあったのであろうか。

伊東氏の佐土原支配は、建久元年（1190）源頼朝が工藤祐経を日向国守に命じて以来である。京都の東福寺の系統を引く大光寺は、伊東祐聰によって建立された。中世のころは、自領を守るために中央の本寺の傘下に入っていた。そこで、伊東氏は大光寺に所領を寄進することによって中央とのつながりを強めた。したがって、寺領寄進は他の豪族の寄進率先を計ることにもなった。大光寺は、伊東氏が統治機能を宗教（精神）でおおいにしつけ、寄進さらには領地支配を容易にした施設でもあった。

では、臨戦に備えた防禦としての寺はどうであろうか。寺の建築構造も時代を追うごと

に変化する。建築遺構の基礎である掘立柱建物から礎石柱建物への移行は、佐土原城の歴史的背景の中で触れているように城郭の変遷ともかかわってくる。城郭といつてもどの施設までをその範囲に入れるかによって、組織の境界領域の線引きが違ってくる。城の周辺に存在しがちな寺は、特にその意味するところが大きい。

佐土原城を取り囲むようにして、現在、大光寺・松巖寺・吉祥寺・多楽院・誓念寺・高月院・崇称寺の7寺院がある。明治4年（1871）に起こった廢仏毀釈運動以前は、図1で示しているとおり17にも及ぶ寺があった。各寺は防禦を踏まえて配置され1～9、13・15・16は東側、12は西側、14は北側、10・11・17は南側と城郭のまわりに建られている。これは支城との関係で探っていけば、まだ多くの寺が復元できるであろう。

寺の派生は、城主が勢力を伸ばしていく過程で生じたものである。伊東氏が佐土原へ入ってくる以前から東禅寺と住民は、禅宗を通して深いかかわりをもっていた。それが大光寺建立の土壤になっている。さらに、各寺の信仰宗派は真宗・日蓮宗・真言宗・浄土宗がある。

近傍に城があると、とかく城の姿や城下の町並に目を奪われがちで城の歴史上の背景関係にまで考えが及ばないのである。そうしたことは寺院・神社についても例外ではない。これは、城郭を中心とした当時の社会構造を蘇らせ、現代の人びとの生活に身近な資料とするには欠せないものである。現存する7寺院、これは日向地方全体からみればかなりの数で、一説によると家老能勢直陳が一宗一派で寺院を残したからだといわれる。それゆえにこの地は、将来にかけて佐土原にとどまらず中近世の日向全体の歴史解明に対する重要なカギを握っているのである。

遺跡の位置と周辺の寺院

第1図



※○は、明治4年（1871）廢仏毀釈以後、残された寺院

	寺院名	宗派		寺院名	宗派
1 ○	大光寺	禪宗臨濟宗妙心寺派	10 ●	天昌寺	
2 ○	松巖寺	禪宗臨濟宗妙心寺派	11 ●	城山寺	
3 ●	万陀羅寺		12 ○	高月院	浄土宗鎮西派
4 ○	多楽院	真言宗	13 ○	崇称寺	浄土真宗西本願寺派
5 ●	憩梅庵		14 ○	誓念寺	浄土宗鎮西派
6 ●	十輪寺		15 ○	吉祥寺	日蓮宗八品派
7 ●	自得寺		16 ●	原昌院	
8 ●	深股寺		17 ●	正龍寺	
9 ●	新山寺				

佐土原城址位置図

第2図



### 3. 町文化財の指定

佐土原城址は、開発の波が押し寄せる佐土原地区の真っ只中にあるにもかかわらず、その姿を300年にもわたって一鉢も寄せ付けず守り抜いて来たと言える。それは、城址が自らその姿を人の目から隠したものか、代々住んだこの地域の人々が、ここを侵せない聖域として守って來たものかは分からぬが、「周知の埋蔵文化財であるから大切に保存しなければならない」と祖先が考えたことは想像にかたくない。

思うに30年くらい前のみかん園畠開発や最近のゴルフ場開発、宅地造成などこの周辺の広大な地域が開発されたにもかかわらず、この地を外して行われている。また、行政の手も差し伸べられず、ただ郷土史家の方たちのみが、ここに目を向けられ登城道の草を払ったり案内板を立てたりして整備をされていたに過ぎない。現在も城址の中に一人分け入っても杉林と孟宗竹林の暗く寂しい山林である。ここに初めて佐土原町合併30周年事業として公園建設が計画されたことは第1章で述べたとおりである。さいわい県文化課の指導により山肌を剥ぐ造成工事は中止され、文化財としての新たな見直しが必要となり、またもや城址は開発の手を拒絶したのである。

私たち教育委員会では、このような歴史の経過もふまえながら、このすばらしい文化遺産を永久に後世に伝えるため、町の文化財に指定しようということになり、平成2年6月から土地所有者を尋ね、文化財指定の承諾と登城道の無償通行許可をお願いし廻ったものであり、同年10月25日念願の指定史跡を告示できた。53人の土地所有者の皆様には深く感謝申し上げる次第である。

ただ、佐土原城址全域は278,924m<sup>2</sup>という広大なものであり、今回の指定はその一部にすぎない。今後ともますます文化財の重要性を訴えていきながら全域を指定史跡とし、城址を全町民が「誇れる場」とすることを目指すことが、ここに足を踏み入れた私たちの使命であろうと感じられるのである。

文化庁長官 殿

佐教委発第589号  
平成2年11月1日

佐土原町教育委員会  
教育長小野勝

文化財の指定について（報告）

文化財の町指定を行いましたので、文化財保護法第98条第3項の規程により、及び文化財の保護のための条例の制定等の場合の報告に関する規程に基づき下記のとおり報告します。

記

1・種類、及び名称

史跡 佐土原城址

2・指定年月日

平成2年10月25日

3・所在地

宮崎県宮崎郡佐土原町大字上田島

（地番、面積等については別紙のとおり）

4・指定の理由

佐土原城址は、本町の歴史の正しい理解に欠くことができず、かつ、その遺跡の規模、遺構、出土遺物等において中世山城として学術上の価値がきわめて高いと認められ後世の研究に資するため史跡として指定する。

5・現状

山林、原野、水田、畠

6・その他参考となるべき事項

1) 歴史

佐土原城は、鎌倉時代に源頼朝によって地頭職として派遣された工藤氏が豪族となり、居館を構えたのが始まりといわれており、伊東氏、島津氏と続く歴史の覇者によって山城の要害としての整備がおこなわれたようである。その後、寛永2年に2代島津忠興が、山城の居館から山の下に御殿を移し、佐土原島津3万石として明治2年の広瀬転城まで、この地で藩を統治していたものである。

2) 平野部の発掘状況

平野部の発掘調査は、平成元年2月から3月にかけて遺構の試掘調査を行い堀や柱の礎石などを検出した。平成元年11月から本格的に第1次発掘調査を開始し、3000m<sup>2</sup>にわたり御殿跡を発掘した。この調査では、大広間、書院、数寄屋、倉庫、番所など約5百の柱跡や礎石、5千点余りの陶器、瓦など、また石や木片を組み合わせた排水溝、井戸の跡などの遺構が現れた。

平成2年6月から開始した第2次発掘調査では上御門、下御門、塀の跡が2000m<sup>2</sup>にわたって現れた。

佐土原町教育委員会では、地面測量や航空測量で遺構の解析をおこなったり、現地説明会を開催して埋蔵文化財の重要性を町民に知らせる場として活用している。

承諾書

平成2年 月 日

佐土原町長 殿

住 所  
氏 名

印

下記の文化財が町指定史跡として指定されることを承諾します。

記

1. 名称 佐土原城址
2. 所在 宮崎郡佐土原町大字上田島
3. 該当土地の表示  
宮崎郡佐土原町大字上田島

字	本番	枝番	地目	地積

承諾書

私は、佐土原城址跡内の下記の私の所有する土地で、登城道路の部分を通路として無償で通行することを認めます。

（登城道路の整備についても佐土原町でおこなうことを認めます。）

平成2年 月 日

住 所

氏 名

印

該当土地の表示

宮崎郡佐土原町大字上田島

字	本番	枝番	地目	地積

## 別紙

佐土原城城址所在地：佐土原町大字上田島

字	本番	枝番	地目	地積
追手	1327		田	3,490
追手	1328	1	田	2,243
谷	8231	1	田	151
"	8231	3	田	479
"	8231	2	田	274
"	8232	1	山林	200
"	8232	2	山林	1,696
"	8232	15	山林	377
"	8230	2	田	960
"	8230	1	田	833
"	8234	1	畠	291
"	8234	2	雑種地	155
"	8235		田	702
"	8236		田	706
"	8227	1	田	1,307
"	8228	1	田	576
"	8226	1	田	382
"	8257		田	192
"	8258		田	734
"	8239	1	田	1,717
"	8239	2	田	1,288
"	8233		原野	535
"	8232	5	山林	3,927
"	8242		田	3,048
"	8247		山林	522
"	8248		山林	651
"	8232	4	山林	6,236 一部除く

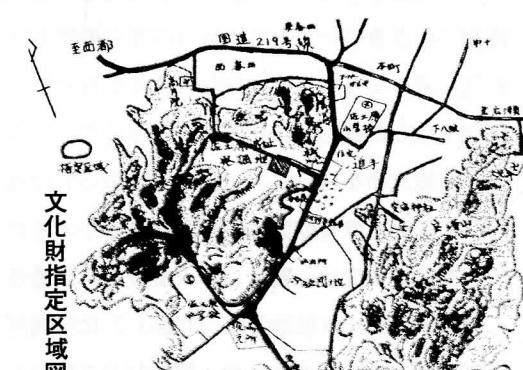
字	本番	枝番	地目	地積
谷	8232	6	山林	1,933
"	8232	7	山林	5,209
"	8232	8	山林	4,374
"	8232	9	山林	2,497
"	8232	10	山林	2,860
"	8232	11	山林	1,600
"	8232	12	山林	5,757
"	8232	13	山林	5,068
"	8232	14	山林	729
野久尾	8328	1	山林	13,764
谷	8326		山林	1,481
"	8250	3	山林	7,442
"	8250	2	田	2,701
"	8250	1	山林	1,464
野久尾	8327	3	山林	626
"	8325		山林	1,464
"	8282		山林	3,956
谷	8262	5	山林	10,660
"	8250	4	雑種地	132
"	8244	1	原野	133
"	8251	1	山林	9,941
"	8261		山林	1,239
"	8260	*	田	544
"	8259		田	379
"	8262	6	田	211
"	8225	1	田	651
"	8224	1	田	158
"	8262	1	田	1,024

字	本番	枝番	地目	地積
谷	8263		山林	1,087
"	8264		畠	374
"	8264	1	山林	55
"	8265		畠	333
"	8265	1	山林	46
"	8262	4	山林	3,220
"	8266	2	山林	94
"	8266	1	畠	325
"	8266	3	原野	77
"	8267		田	423
"	8267	1	山林	71
"	8267	2	山林	301
"	8280		山林	497
"	8271	1	山林	44
"	8269	2	畠	367
"	8269	1	山林	403
"	8269	3	山林	257
"	8275		田	775
"	8274		田	212
"	8273		田	210
"	8272		山林	262
"	8272	1	山林	88
"	8275	1	山林	55
"	8270		山林	701
"	8281	1	山林	403
"	8281	2	山林	581
"	8268	2	山林	165
"	8276		田	671
"	8268	1	山林	2,966
"	8278		山林	1,497
"	8277	1	山林	8,191

字	本番	枝番	地目	地積
谷	8202	3	田	148
"	8200	4	田	186
"	8199	2	畠	323
"	8199	1	雑種地	930
"	8262	7	山林	10,307
"	8227	3	山林	1,982
"	8235	2	田	56
"	8239	3	田	1,462
"	8271		山林	253
"	8199	3	山林	156

但し、樹木類を除く

筆数 96 筆

面積 162,223 m<sup>2</sup>

#### 4. 佐土原城址の歴史的背景

##### —特に学史的視点から—

佐土原城がいわゆる城として機能するようになったのは、戦国期、特に15世紀に入ってからである。このころは、伊東氏は日向一円を勢力範囲に置くために攻撃の城を必要とした。

そこで、建久元年（1190）工藤祐経が源頼朝より地頭職を命ぜられ田島庄に着任して以来の佐土原城と伊東氏のかかわりが、ここに至って居住空間から戦闘拠点へと性格を変えたのである。当時それを押し進めたのは四代祐立、弟の祐賀たちであった。彼らは戦場を宮崎、清武、田野、門川と広げてゆくために、海岸線に沿った進攻を容易にする佐土原城を手に収めたのであった。この城も伊東氏が手中にしたときには、自然地形をそのまま要塞化する南北朝時代特有の城造りが採用されていたのである。九州地方では、福岡県柏原郡新宮町に所在する立花城が代表的である。居館を馬蹄形に取り囲んだ山城は、防禦に適している。また山城はどのような使われ方をしていたかというと、主に山上が詰城（戦時に詰める場）で、山下が根小屋（日常の場）に分けられて生活が営まれていた。

ところが、戦国期になり戦闘が日常化してくると臨時的な場では対応できず、そこで生活可能な施設造りへと状況が変わっていく。例えば、曲輪の拡大、空堀（堀切・堅堀・横堀）の複雑化によって定住・防禦の促進を計るなど生活域を広げた要塞を築き上げていくのである。戦国期も終末に入ると、織田・豊臣両氏が政権を握るようになり、地方にも様々な点において影響を与え始めた。特に、石垣を取り入れた城郭構造は、中世から近世に至る時代転換期への要素の一つとでも言うべきものであった。その理由として2つあげられる。まず、鉄砲伝来により戦術の大幅な衣替えが行われ、従来の個人の力量を重んじた騎馬戦から組織集団を成した鉄砲戦へと戦い方が移っていく。つまり、一個隊ごとにいくつも組織された鉄砲隊が城攻めを行うと、以前の土で造られた城であれば弾丸を防げず城内の兵はひとたまりもない。そこで長期間戦う防禦体制を整えるため城壁を石で築くようになったのである。その起源については、観音寺跡（滋賀県）が最古とされている。その記載は金剛輪寺文書の『下倉米錢用張』〔弘治2年（1556）〕に「御屋形様石垣打申」とある。またこの時期のものとしては、斎藤氏の岐阜城居館跡などの数例があげられる。石垣の本格的な普及は、元亀年間から天正初年（1570年代）の織田氏系列の城郭に始まった。

今ひとつ、注目に値することは、鉄砲隊に対する防禦に、長期の滞在に耐えられる大きな建物を築くことであった。では、建物を強固に築く場合どのような方法が採られるのであるか。第1は礎石が柱の土台に使用された。つまり壁が石垣なのでそれを支える礎石が必要となったのである。第2は屋根に瓦を葺いて建物の恒久性と高層化に応じた。要するに、建物と礎石・瓦・石垣は、互いにかかわり合い、時代の要求に応えて出現したものである。こ

れにかかる城郭研究の趨勢に従って「中世城郭から近世城郭へーその差異と接点ー」をテーマにした第7回全国城郭研究者セミナーが、1990年小田原市において開催された。ここで議論は、織田・豊臣両氏の影響（石垣を主とする施設）が、いつごろ・どこまで及んでいたかが焦点となっている。

近世城郭遺構は、枠形虎口・馬出し・横矢がかりなどがあげられるが、石垣は虎口にも使用される。それは何を意味するのであろうか。石垣すなわち近世城郭遺構とはいえないということである。事例として、天正18年（1590）秀吉の小田原城攻めに対処するため後北条氏は山城の最高水準といわれる山中城を築き、片や秀吉方は、石垣山に総石垣造りの陣城を築城した。まさに裸城と、いわば鎧・兜に身を固めた城の戦いであったが、わずか半日で山中城は落城した。しかし、両城を構成する骨格の遺構は、ほぼ同じものである。反面、戦国期の代表的大名である後北条氏が、天正12～15年（1584～87）の間に、築城したと思われる八王子城跡（東京都八王子市）での発掘調査の結果、石敷きの枠形虎口が石垣を伴って検出された。また土佐の長宗我部氏の居城である岡豊城で、天正3年（1575）の銘瓦が発掘調査で出土したことは、この当時から礎石建物・石垣と結び付いた普請（縄張り）及び作事（建築工事）が行われていたものと考えられる。

だが織豊系城郭との相違は、普請と作事のバランスがよくとれていないことである。その点がはっきり現われるのは、虎口と天守台部分であり、それはまた近世城郭の構成要素として重要なところである。つまり総石垣造りでも虎口は単純な構造であったり、織豊系城郭以外にも多く見られたりするからである。

では、中世から近世に至る全国の城の変遷は、中央権力のシンボルとされる礎石・瓦・石垣の充実度により、すべて語りつくせるのであろうか。

城郭研究者の間では、北方のチャシ、沖縄のグスクは辺境の城と呼ばれているが、広義では本州の北端、南端方面も辺境に含まれている。分類の立場からは、チャシやグスクは民族・風土とも本土とはまったく異なる空間で育まれたもので問題はない。だが広義でいう辺境に入る本州の城は、中央の支配の中で影響を受けているとともに中央との距離が本土の中でも最も遠いという二面性をもっているため、城造りの土着性が根幹で失われずに残り、中央と地方の変容を考える上で貴重な資料となる。

そこで城の変遷を平面的に述べるとするならば、3つに分けることができよう。まず、中央すなわち織豊系支配の下で、直接の指導で城を築いた地域、次に中央の城郭との融合の形態となった本州辺境地域、最後に北海道・沖縄を主な舞台とする辺境地域に大別される。近年、本州辺境地域は徐々に重要視されつつある。特に昭和52年から今日まで継続して行われた浪岡城（青森県浪岡町）の調査によって、戦国期の北日本あるいは津軽の社会構造が明らかになった。この調査はこの地域の縄張りが無秩序で辺境型であるとする従来の説に対して、

城郭を城館と集落のセットで捉え直す思考を与えるに至った。さらに、青森県八戸市根城・  
同青森市尻八館・同弘前市境関館などにおける調査で戦国期城館以前の資料も集められている。

南の方では、どうであろうか。薩摩・大隅を拠点に九州制覇を狙う島津氏と他大名との攻防、また中央から制圧をかけた豊臣・徳川両氏との絡みを背景に政局は転換していく。この中で城はその時々の支配者の意識を最も反映する。特に、全国の中でも有力な大名であった島津氏と隣り合っていた日向の伊東氏は、中央権力の座にあった豊臣氏にも挟まれ不安定な立場に置かれていた。そうした背景の中で伊東義祐は天文10年（1541）から飫肥城を攻め、ついにこれを永禄12年（1568）に落とした。ようやくここにおいて、伊東氏は日向48城を手中に収めた。義祐はさらなる野望を抱いたが、元亀3年（1572）木崎原（えびの市）の戦いで島津義久に敗れた。これが天正5年（1577）の島津氏進攻による伊東崩れの最大の原因となる。因みに、その野望は彼の建立した照珪山金柏寺に寄進した鐘の中で「日本國日向国田島莊、照珪山金柏寺天文廿又一年壬子八月二十日これを成就す、日薩隅三州太守藤原義祐朝臣、前ノ総持永平直翁照眼大和尚」と記されている。そこで島津氏は天正六～七年にかけて大友氏と戦い高城（児湯郡木城町）でこれを打ち敗り、その勢いで九州全土を席捲するにおよんだ。ここで中央の覇者である豊臣氏は天正15年（1587）に九州平定の軍を向かわせ島津氏がこれに屈服した。日向の島津氏支配の要は佐土原城で、城主には家久を置き領内の地頭を統轄させていた。豊臣氏の配下になっても同じく家久が用いられた。続く関ヶ原の戦いで、島津氏2代豊久が戦死して一時期徳川直轄地となる。その後、慶長8年（1603）家康は島津義弘の叔父にあたる忠将の子、以久を佐土原に封じた。以後は明治4年（1871）7月の廢藩置県で佐土原藩が廃藩となるまで島津氏が治めていた。

佐土原城は、何度も主が入れ代わるが、このことは城の構成要素の分析を進める場合、重要なってくる。また本州辺境地域という中央と地方の意識がぶつかり、互いの要素を淘汰吸収し合い、俗に文化が現象化する地帯としては理想的なところに位置した城である。さらに伊東氏48城を中心とする日向の中世城郭300余りの内、100ほどは現在でも良好な状況で残っているが、全国水準での城で城郭と居館部とともに保存状況がよいのは、佐土原城があげられるばかりである。日向の他の城は、開発行為による多くの城郭遺構の破壊をみた。このことは最近、「日向の中世山城の現状と課題」を素材にして開かれた、宮崎考古学会で報告された。調査が実施されているのは、縄張り図作成もふくめて25城（内13支城）にすぎない。その中でも本格的な調査を行ったのは、佐土原城と都之城に限られている。まず都之城は、城の郭部の調査で居館部は現存せず調査不可能である。

そこで、佐土原城の城郭部と居館部の良好な保存状況は何を意味しているのであろうか。つまりそれによって今後、両者の調査を進めていけば史学界で定義が確定してない「山城か

ら平城あるいは、中世から近世の移行問題」を解く貴重な資料になるであろうということである。このため、佐土原城の第1次から第2次の調査で、居館部が良好な状態で検出されたことにより学界の刮目に至った。だが総体的にいって、本州南方の辺境地域の研究は、北に比べてかなり立ち遅れている。

以上から推し量っても佐土原城址の置かれた立場は、歴史上、学史上において極めて重要である。そこで、ここではさらに、多角的に佐土原城の各遺構を追っていく。

#### 石垣について

「旧事集書」の一節に「天守台の跡山の北ニあり、式重天守ニテ石垣の跡あり、此左右堀五百間余ありたる由、唯今石の多く積重ねある所ハ、権藤大学石垣を築く事上手ニテ、谷山五右衛門杯稽古為し、処々に有し石を起し取て石を疊稽古せし跡也、夫依リ内に天守は有りたるよし、比切石は細嶋石のよし。」と記され、伊東氏時代から天守台付近に石垣の存在が推測できる。

#### 平城について

江戸期に佐土原を巡視した中川家の家臣が城と城下について記録したものが、中川家文書として残っている。その一節に、「しまつうまのかミ様之御城本佐土原町、御城平城、町5ひかし御門壹口、きたミなミに式口、御城のまいり侍衆御座候、町八城城5ミなみにいゑ数式百ほど、町5ミなミに川御座候、これハ川ふね人、川くちとくのふち申処ふね付、御城5間壹里ほど」とあるが、この当時、関東方面から城を觀ると佐土原城は、平城の範疇にあった。

ここにあげた平城と石垣は、城郭の眞の役割をキャンパスに描く際の一例で、具体的には平城を空間軸（地形）、石垣を時間軸（織豊系）として据えていく方法である。それは歴史研究で大切な、自らどの場面にでれ身を置ける、ひいては客觀性をもつことにもつながるのである。

最後に、佐土原城の歴史解明は、時間軸の設定が基礎資料として必要で、居館部の柱穴・建物遺構、または、城郭部の曲輪内建物遺構・柱穴から進めていく。この作業を基に今後の南方本州辺境地域解明の第一歩としたい。

以下、佐土原城に関する年表を付する。

和暦 西暦 主な出来事

建久元年（1190）伊東氏の祖工藤祐経、地頭に補せられ、合わせて児湯郡240町を領す  
 建久4年（1193）祐経、曾我兄弟に討たれ、その子祐時所領を引継ぐ  
 建久8年（1197）日向図田帳に八条院領国富荘の一郷として佐土原15町と記される  
 建長4年（1252）祐時死去、この頃四男祐明田島庄に下向、田島伊東の祖となる  
 建武2年（1335）伊東祐聰上田島に大光寺建立  
 延元3年（1338）畠山義顯 伊東祐勝の子 金熊丸（伊東顯祐）に上田島庄堤村の本領を安堵する  
 応永32年（1427）伊東氏、支族田島氏を滅ぼし、祐立の弟祐賀を「佐土原」と名乗らせ、田島氏を相続した形で佐土原城に居らしむ  
 文安5年（1448）祐賀 巨田神社を修造する  
 天文19年（1550）弓削雅楽入道、佐土原で四体千字上梓  
 天文21年（1553）義祐、佐土原に照珪山金柏寺建立、大鐘寄進  
 永禄11年（1568）義祐、飫肥城攻略、その子祐兵を配置す  
 元亀3年（1572）木崎原合戦、伊東軍大敗す  
 天正5年（1577）義祐一族、米良越えで豊後に走る  
 天正6年（1578）島津以久公吉祥寺（鬼子母神）創建  
 天正7年（1579）島津義久、家久を佐土原に封ず  
 天正10年（1582）伊東満所等少年使節ローマへ向かう  
 天正15年（1587）秀吉薩摩一国を義久に、大隅一国を義弘へ、佐土原を家久へ安堵  
 天正16年（1588）誓念寺創建（開山応誉上人）浄土宗  
 慶長2年（1597）島津義久、豊久朝鮮に再び出役す  
 慶長4年（1599）豊久、庄内の乱に出兵  
 慶長5年（1600）関ヶ原の戦、島津は西軍に属し、豊久は殿軍して戦死、義弘中央突破して細島に上陸佐土原を経て帰る  
 祐兵の臣清武城代稻津掃部重政、宮崎城を陥れ、佐土原を攻む  
 慶長8年（1603）島津以久、佐土原3万石就封  
 慶長15年（1610）高月院創設（佐土原島津菩提寺）貞安上人開山（浄土宗）  
 慶長19年（1614）2代忠興が大坂冬の陣に従軍  
 元和元年（1615）同、忠興が大坂夏の陣に従軍  
 寛永2年（1625）居城を山の上の城から山下の二の丸に移した  
 寛永14年（1637）3代久雄が天草の乱に出兵

承応2年（1653）佐土原大火、城地を除き全焼  
 寛文6年（1666）日講上人が流されて佐土原に来た。4代忠高は手厚くもてなす能を催し一般に公開した  
 延宝3年（1675）弁天山に太鼓を置いて時刻を報じた  
 貞享3年（1686）松木騒動が起こる  
 元禄3年（1690）5代惟久が家をつき番代久壽に島之内三千石を分知した  
 元禄12年（1699）佐土原藩主城主列となる  
 元禄13年（1700）財政窮乏のため武士の知行の半分を没収  
 寛延2年（1749）6代忠雅が蔵高の検地を行った  
 宝暦5年（1755）弁天山の時報の太鼓を鐘に代えた  
 明和6年（1769）佐土原大火 456戸焼ける  
 文化7年（1810）伊能忠敬城下に滞在し測量する  
 文政6年（1825）儒者御牧赤報を招いて学問を勧めるも、文武両派が対立し、文政8年鳴之口騒動が起こる  
 天保10年（1839）10代忠寛がついだ  
 文久3年（1863）英艦が鹿児島襲撃の報があり忠寛は鹿児島へ赴く  
 同年隨真院日記ができる  
 明治元年（1868）戊辰の役に出兵、佐土原隊京都に出発  
 忠寛参内、錦旗と龍剣を賜う  
 明治2年（1869）版籍奉還により忠寛は藩知事に任せられる  
 同年知政所を広瀬に移した  
 明治3年（1870）佐土原城を廃した  
 明治4年（1871）廢藩置県が発令される 佐土原藩を廃し佐土原県となる  
 同年延岡、高鍋、佐土原の三県を廃して美々津県が置かれた、同時に都城県が置かれた  
 明治6年（1873）美々津、都城の二県を廃し宮崎県が置かれた

和暦 西暦 主な出来事

建久元年（1190）伊東氏の祖工藤祐経、地頭に補せられ、合わせて児湯郡240町を領す  
 建久4年（1193）祐経、曾我兄弟に討たれ、その子祐時所領を引継ぐ  
 建久8年（1197）日向図田帳に八条院領国富荘の一郷として佐土原15町と記される  
 建長4年（1252）祐時死去、この頃四男祐明田島庄に下向、田島伊東の祖となる  
 建武2年（1335）伊東祐聰上田島に大光寺建立  
 延元3年（1338）畠山義顯 伊東祐勝の子 金熊丸（伊東顯祐）に上田島庄堤村の本領を安堵する  
 応永32年（1427）伊東氏、支族田島氏を滅ぼし、祐立の弟祐賀を「佐土原」と名乗らせ、田島氏を相続した形で佐土原城に居らしむ  
 文安5年（1448）祐賀 巨田神社を修造する  
 天文19年（1550）弓削雅楽入道、佐土原で四体千字上梓  
 天文21年（1553）義祐、佐土原に照珪山金柏寺建立、大鐘寄進  
 永禄11年（1568）義祐、鈴鹿城攻略、その子祐兵を配置す  
 元亀3年（1572）木崎原合戦、伊東軍大敗す  
 天正5年（1577）義祐一族、米良越えで豊後に走る  
 天正6年（1578）島津以久公吉祥寺（鬼子母神）創建  
 天正7年（1579）島津義久、家久を佐土原に封ず  
 天正10年（1582）伊東満所等少年使節ローマへ向かう  
 天正15年（1587）秀吉薩摩一国を義久に、大隅一国を義弘へ、佐土原を家久へ安堵  
 天正16年（1588）誓念寺創建（開山応誉上人）浄土宗  
 慶長2年（1597）島津義久、豊久朝鮮に再び出役す  
 慶長4年（1599）豊久、庄内の乱に出兵  
 慶長5年（1600）関ヶ原の戦、島津は西軍に属し、豊久は殿軍して戦死、義弘中央突破して細島に上陸佐土原を経て帰る  
 祐兵の臣清武城代稻津掃部重政、宮崎城を陥れ、佐土原を攻む  
 慶長8年（1603）島津以久、佐土原3万石就封  
 慶長15年（1610）高月院創設（佐土原島津菩提寺）貞安上人開山（浄土宗）  
 慶長19年（1614）2代忠興が大坂冬の陣に従軍  
 元和元年（1615）同、忠興が大坂夏の陣に従軍  
 寛永2年（1625）居城を山の上の城から山下の二の丸に移した  
 寛永14年（1637）3代久雄が天草の乱に出兵

承応2年（1653）佐土原大火、城地を除き全焼  
 寛文6年（1666）日講上人が流されて佐土原に来た。4代忠高は手厚くもてなす  
 寛文7年（1667）能を催し一般に公開した  
 延宝3年（1675）弁天山に太鼓を置いて時刻を報じた  
 貞享3年（1686）松木騒動が起こる  
 元禄3年（1690）5代惟久が家をつき番代久壽に島之内三千石を分知した  
 元禄12年（1699）佐土原藩主城主列となる  
 元禄13年（1700）財政窮乏のため武士の知行の半分を没収  
 寛延2年（1749）6代忠雅が藏高の検地を行った  
 宝暦5年（1755）弁天山の時報の太鼓を鐘に代えた  
 明和6年（1769）佐土原大火 456戸焼ける  
 文化7年（1810）伊能忠敬城下に滞在し測量する  
 文政6年（1825）儒者御牧赤報を招いて学問を勧めるも、文武両派が対立し、文政8年鳴之口騒動が起こる  
 天保10年（1839）10代忠寛がついだ  
 文久3年（1863）英艦が鹿児島襲撃の報があり忠寛は鹿児島へ赴く  
 同年隨真院日記ができる  
 明治元年（1868）戊辰の役に出兵、佐土原隊京都に出発  
 忠寛参内、錦旗と龍剣を賜う  
 明治2年（1869）版籍奉還により忠寛は藩知事に任せられる  
 同年知政所を広瀬に移した  
 明治3年（1870）佐土原城を廃した  
 明治4年（1871）廢藩置県が発令される 佐土原藩を廃し佐土原県となる  
 同年延岡、高鍋、佐土原の三県を廃して美々津県が置かれた、同時に都城県が置かれた  
 明治6年（1873）美々津、都城の二県を廃し宮崎県が置かれた

## 参考文献

- 村田修三編『中世城郭辞典』新人物往来社
- 村田修三編『日本の歴史』朝日新聞社 1986年
- 村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社 1990年
- 坂詰秀一編「戦国考古学のイメージ」『季刊考古学』雄山閣 1989年
- 「戦国九州軍記」『歴史群像』学研 1989年

シリーズ12

- 第7回全国城郭研究者セミナー『中世城郭から近世城郭へ—その差異と接点—』  
資料、中世城郭研究会・小田原城郭研究会 1990年
- 「日向の中世山城の現状と課題」  
資料 宮崎考古学会 1990年
- 野口逸三郎監修『佐土原町史』佐土原町史編纂 佐土原町教育委員会 1982年
- 木村明史 「西の一乗谷」『毎日新聞』北九州版 1990年5月17日夕刊
- 「旧事集書一」『桑原文書』江戸期文化年間
- 『中川家文書』臨川書店

## 第2章

### 調査の概要

# 1. 佐土原城址調査レポート

## 佐土原城の山城遺構を中心に

八 卷 孝 夫

### (1) 築城について

佐土原城は、伝承によれば田島氏が鎌倉時代に創築したものだという。しかし、鎌倉期は武装した居館はありうるもの、いわゆる山城を造る段階には至っていないかったと思われるので、これは後世の単なる築城伝説と考えてよいだろう。それでは佐土原城の築城はいつなのであろうか。ここでは史料を確かめる余裕がないので推測を述べるにすぎないが、全国的な傾向からみて、南北朝の動乱前後の緊張状況の中で築城されたと考えるのが最も可能性があると思われる。これはおいおい発掘等で確認されていくであろう。

創築に関しては不明な点が多いが、現在の遺構はどう考えるべきであろうか。基本的には城の遺構は、その終末期のものと考えるべきであるから、この佐土原城の場合、山上の城郭部分が放棄された時点、寛永14年（1637）と考えるべきであろう。しかし、それ以前の緊張時、つまり関ヶ原の合戦以降はそれほど改修する必要がなかったと思われるので、現在の姿はほぼ慶長5年（1600）のものと考えていいだろう。

もちろん慶長5年に全てができたという意味ではなく、基本的な縄張り形成は伊東氏と島津氏との抗争の激化した天文年間ごろという推定ができる。その基本的な縄張りを伊東氏が何次かにわたって改修し、またそれを引きついで島津氏が天正5年以降から関ヶ原の戦いの慶長5年まで改修し続けたのが現在の佐土原城なのであろう。

山下の形成は早くからあったと推定でき、おそらくこの佐土原城の場合の設定当時から使用していたと思われる。それは佐土原城の占地はちょうど山に囲まれた袋状の平地が防禦に適している（その他生産地との関連、流通手段として河川の問題、街道などの関連などさまざまな要素を考えて最も最適だと思われたのがこの地であろうから）と考えられたからに違いない。関東地方にも「馬蹄形城郭」といわれ（この用語にはいろいろ問題はあるが）山に囲まれた平地を居館とし、囲りの山に城を築く例がかなりみられる。これは概ね全国的に分布している占地法だと思われる。

この佐土原城も、この「馬蹄形城郭」の大規模な形と考えられる。それゆえこの占地にあたり、単なる山岳の要害性ばかりでなく、山岳に囲まれた平地の確保が容易であることも考えられていたからこそ、この地が選ばれたと思われる。

それゆえ、この平地は居館としての役割のみならず、政治的なセンターの役割も果たしていたことが推定できる。平地に関してはこれらの発掘がその遺構を次々と明らかにしていくことであろう。

## (2) 遺構について

### a. 全体的な占地

佐土原の地は江戸期になると陸上交通即ち薩摩往還、飫肥往還、肥後往還、米良往還などの結節点にあたり繁栄した。そして、陸上交通の要の一つ瀬川を把握する地にあり、外港の福島も抑え得る地であった。(『佐土原町史』)。中世はこの江戸期ほど整備されていなかったことは当然であるが、ある程度陸上交通の結節点であり、水上交通の一つ瀬川を抑え得る地として重要性は同様なものであったろう。こうした地点の中でこの様な交通路との関連で最もふさわしい地であり、また地域支配の政府を置くのにもふさわしく、居住にも適していて周囲に一族郎党を置ける地、そして周囲を山で囲まれた袋小路の地で要害性に富んだ地ゆえに、防禦的に選ばれた地がこの佐土原の地であったのであろう。

### b. 遺構について

この城は平地の袋状の部分を囲んだ山の部分に、主として西側部分に遺構を展開している。中心をなすのは最も高い地、即ち I の部分である。これが近世の城でいう本丸にあたる。この曲輪 I の西の尾根続きがこの城から外へ続く唯一の尾根続きになっている。ここから南北に大きな谷が降りており、その頂上部分を断ちきれば佐土原城の山塊が独立することになる。しかし I からの斜面は、かなり高く斜度も強いため、防禦的には巨大な空堀があるのと同じ効果があるので、人工の土木工事はほとんど行っていない。I と II 、 III はほとんど同じレベルで、本来地形的には同一の曲輪になるべきものであるが、 I と II 、 II と III の間に空堀を入れ三分割する。これは一つの曲輪にすると大きくて使いにくいうえ、防禦的にも分割した方が有利だからであろう。

I に入るには a の虎口と II から入る土橋状の虎口しかない。a は大手道から上ってくる最も主要な枠形と思われる。この枠形に入る大手道は、腰曲輪 m で常に城内側から攻撃できるようになっている。枠形 a からは曲輪内に入ると空堀道になり、まっすぐに h のある突出部へ向う。この空堀道の意図はよく分からぬが、屋敷割の可能性もしくは、防禦上重要な突出部分へ即座に移動するための二つが考えられる。県内では都於郡城にもあるが関連はこれからの課題である。h はやや高まりになっている。防禦上極めて重要な位置なので櫓台の可能性もある。尾根伝いに面し

ていて、最も敵の来襲の可能性がある地点なので、櫓など防禦性の強い建物を置いたのであろう。

I と II の間の東は何段かの平場に分かれる。本来小さな谷となっていたところを、削平して区画したものであろう。途中の段に虎口 b を造る。ここも枠形になっており、重要な虎口であったと思われる。この虎口は一旦 II に入り、それから I に入るためのものである。しかし、虎口 b から II に行く道は現在かなり壊れてしまっており、はっきりしていない。現在の II に入る道はあまりにまっすぐにに入っていくので当時の道とするには疑問が残る。II には天守台と称される所がある。確かに崩れてはいるが長方形に近い台の遺構があるので、それと考えてよいかもしれない。発掘の成果に期待したい。

III は主郭部の先端にあり、北からの攻撃に対処する馬出曲輪の役割を果たす。IV は直下を回るルートを監視、攻撃する曲輪である。この曲輪をおも北へいくいくつかの曲輪がある。i はかなり大きな堀切で、支脈の一つを切断し敵の進入を防いでいる。j は堀切であるが u のルートとぶつかる。u は切通しの道がない時のルートの可能性がある。これから伝承地名などの調査、遺構の精査をすべきであろう。

また I にもどり、東の尾根を考えよう。V は堀切であるが、虎口も兼ねる。この V から東へ行くと曲輪 IX 行く、ここは独立した曲輪になっており、直下を通るルートの抑えを目的としている。ここから北へは支脈が続き何段かの削平地がある。n は一見段にしか見えないが明らかに壁は両面にあり、堀切と考えてよいだろう。k は虎口で急な坂ではあるがかなり重要なルート入口であったろう。

江戸期の図によれば、ここに城門があったことになっているが、実際壁面にはぞ穴のようなものがあいており、もしかするとこれは門を取り付けた痕跡かもしれない。この k の虎口を抜けると谷筋の何段かの削平地(「佐土原城下図」によれば、屋敷らしい)がある。k の虎口をはさむように X の曲輪がある。X の曲輪面はたくさん溝が走っている。これは遺構ではなく、後世の根切りであろう。北方の支脈は I の大堀切りで切断し、防禦を固めている。北東の支脈はあまり人工的な削平地はないが、比較的細い堀切 W で切断する。豎堀となり南と北の斜面を降りるが、南の方が長い。南の下段の削平地には x の井戸がある。近くに谷を渡る土塁の跡と思われる m がある。

再び I の曲輪にもどり、南の尾根へいくことにする。t の地点は東西から谷に入ってくるその頂上にある。まさに天然の大堀切りで、t はその土橋に相当しよう。東方面の最大の防禦線といえる。西の谷筋の曲輪 VII は屋敷地の可能性がある。土塁で囲まれ瓦の破片も多い。VII の北辺はルートになっている。外の防禦線の谷から VII

の谷筋へ入って主郭部へ向かうルートである。Vは伝承名は「南の城」といわれている曲輪である。ここは主郭部の外の要の位置にある。尾根筋は全てこのVに収斂している。防禦的には最も重要な曲輪であったろう。防禦面の東南のみに土塁がめぐる。虎口はcであり、枒形になっている。虎口cのある側面の地形はかなり壊されていて、他の虎口や防禦設備が予想されるが現状では不明である。南には櫓台yがある。ここは尾根に直接面しており、強力な防禦が必要なため作られたものであろう。実際に櫓があった可能性は強い。この櫓台の裾は広がっており、中腹を通るルートはこの裾につきあたるようになっている。西の側面には豎堀gがある。豎堀とは山腹に豎に堀をいれるもので、山腹を横移動して攻めこもうとする敵を防ぐためのものである。この豎堀はかなり大きなもので、きわめて遮断性の強いものである。佐土原城の中では明らかな豎堀はあまり見られないので、かなり貴重な遺構といつていい。時期的には最末期のものであろうと思われる。島津氏の築いたものであろうか。一段下の曲輪には虎口dがある。L字形に空堀状に道を作った虎口である。これも枒形の一種で、重要なゾーンへ入る関門にあたるため、大きな枒形を作ったものであろう。続くもう一つの曲輪を越え、やせ尾根を抜けると「松尾丸」と伝承される曲輪VIIIに至る。最南端の曲輪で南方面の前線にあたる位置を占める。そのため南にはrの横堀（道路に使われていたろう）、また西にも横堀を入れている。またVの曲輪にもどり東へ向かうこととする。Vからは東南の尾根とVIに続く尾根、東北の尾根と三つに別れる。東南の尾根は三つの大きな削平地を作って処理する。東北の尾根は堀切で切断する。この堀切は大手道の堀底道となっている。小さな尾根ではあるが削平地、堀切とつなげる。東の尾根は大きな曲輪VIにつづく。このVIの下を大手道がめぐっている。このVIから常に道が抑えられるわけである。この曲輪は大手道を守るために重要な曲輪である。この大手道は尾根上を空堀状に堀り込み、尾根の先端から本丸にあたるIへつづく。この城の中で最も重要な通路である。遺構も江戸期に近い形で良好に保存されているようである。こういった形での大手道の設定は、それほど類例はなく極めて貴重な遺構である。このように空堀状にしたのは登り易くするため、風除けのため、通路の保全のためなど日常的な理由も大きいと考えられるが、最大の理由は防禦上の必要性であろう。この通路の西側は土塁状になっており、兵員の移動も可能である。つまりこれは敵の侵入の場合、敵の侵入路をこの道路のみ限定し、常に両面から攻撃を可能にしたものであろう。また土塁上には所々に自然地形であるが、やや広い小曲輪状の平地が見られる。

この大手道の尾根から派生する小尾根は、それぞれ削平地などで処理している。中でも特徴的な遺構はfである。これは単なる堀切であるが、通路の堀切を考える

と二重堀切にしているのである。これもこの城の中では珍しい遺構である。以上で城郭の主要部分を占める南の山塊部分の解説を終える。

北の山塊部分には築城遺構はあまり認められなかった。しかしこの部分は、もちろん当初から城郭の不可欠な要素として存在したのであるが、それほど人工的に築城する必要性を感じなかつたためであろう。この山塊の中心部分は、現在神社のあるpである。ここはこの方面では一番の高地にあたるので、曲輪を作っていた可能性がある。神社は東北の鬼門にあたるため、当初から置いていたかもしれない。周囲はいくつかの削平地があるが曲輪を作ったものかどうかは不明である。南の尾根のoは堀切である。この方面では唯一の遺構である。比較的登りやすい尾根なので堀切で切断したものである。このほかこの山塊の尾根は、通路状の削平地が続くがどれも城郭遺構とは断定できなかった。

南北の大きな山塊に囲まれた地は、もともと居館が設定された場所である。これから発掘により建物、庭園、道路などが明らかになろうし、武家屋敷の屋敷割も明らかになるかもしれない。yの位置は堀である。巨大な土塁と堀で袋状になった居館部を守る施設である。試掘によればかなり巨大なものなので、江戸期のものであろうが、地形的に見て伊東氏時代からこのあたりに規模は小さいにしても土塁、空堀は設定されていたであろう。この佐土原城の周りには、外堀も設定されていたようである。現在はこれが用水路として残っている。二か所ほどわざわざクランクしているので、堀を用水路に利用したものであろう。

### (3) この城の価値

以上述べたように、一見さほど土木工事をほどこしているように見えなかった佐土原城も詳細に観察すると、枒形、櫓台、堀切、防禦的な道路、横堀、豎堀などを縦横に駆使した城であることが分かる。伊東氏以来、島津氏も何回も改修され現状の姿になったと思われる。城の遺構がどの時代か考えるのはむずかしいが、概ね山城の基本は伊東氏のものと思われ、山城の通路や枒形、平城部分はどちらかといえば島津氏のものであろうと推定したい。遺構の中では、日本の中世城郭の中でも非常に貴重と思われる空堀状の通路遺構が目立つ。この通路をはさむように土塁を連ね常に歩くものを挟撃している構造はかなり特異なものである。また主要な曲輪へ入る位置に作っている枒形虎口もいくつか見られた。年代的には降りるものであろうが、時期的な意味も含めて貴重である。

また堀切も要所に残っており、数は少ないながらも大規模なものもあって貴重である。

天守台の想定地には、それと推定できる高まりがあり、発掘によって見つかれば貴重な発見となろう。その他居館では破壊されてはいたが、発掘により全貌を現わしつつある大手の大堀と土塁、居館地の屋敷割などいずれも貴重である。また外堀も水路となって残っており、これも含めるとほとんど佐土原城は無傷で残っていたと考えることができる。

戦国時代から江戸時代にかけて、地域の中心となった山城とその居館部が、両方合わせて残っている例はさほど多くない。全国的にみてもごく珍しいといってよい。思いつくのは、大和の高取城、備中の高梁城、因幡の鳥取城などである。その意味でもきわめて貴重な遺構ということができる。越前の一乗谷城や近江の小谷城、日向の都於郡城なども戦国時代に戦国大名の中心の城となって繁栄したが、いずれも江戸時代には使われていないのである。またこの佐土原城は、城自体の保存がすばらしいが、それと同時に歴史的な景観である地割の保存、寺社、街道などがほぼ江戸期のまま残されていることも重要であろう。佐土原城を中心としたその複合体ともいべき城下町の構成要素がかなり残されているのである。こうしたことも含めると、この佐土原城の価値は、はかりしれないものになるといえよう。

※ 地割……道沿いに短冊型に家の敷地を割っていたもので、古い建物はないものの、地割そのものは、現在でも明瞭に残っている。

#### (4) 佐土原城の保存と活用

佐土原城が極めて貴重な価値を持つ城であることは前述したが、それではどのような形で保存、活用すべきであろうか。佐土原城の遺構は、一見いずれもただの山と思われるものなので、特に破壊されやすい。一例をあげると、大手の道路も、巾を広げるだけで価値を失ってしまう。ほとんど無傷のまま残っている空堀状の通路はその狭さ、不便さが遺構の価値である。登城に便利なように直してはこの城の通路の役割がわからなくなってしまうのである。そうはいっても佐土原町の貴重な文化財であるとともに、町民の心の拠り所であり、誇りでもあるわけであるから、その活用は遺構の破壊をしない範囲内で、積極的にしていく必要があろう。一つは、城内の主要遺構を巡る一周路を作ることにより、城郭への理解を深めることであろう。ポイントポイントには、金属等半永久的な素材で説明板を作り、その遺構の説明を図をまじえながらするとよいだろう。また場所によっては歴史的な説明も入れて、城内を一周すると城の構造もわかり、歴史的な背景もわかるようにするようにしたい。子どもたちにはスタンプラリーなり、ミニオリエンテーリングなども、季節によっては考えるのも一興であろう。こうした山城の活用とともに、居館部の将来できるであろう資料館、復元

された水堀、また場合によっては見つかるかもしれない庭園、建物の礎石などの位置の標示などで、総合的に城郭を理解できる自然を生かした一大歴史公園となるのではなかろうか。

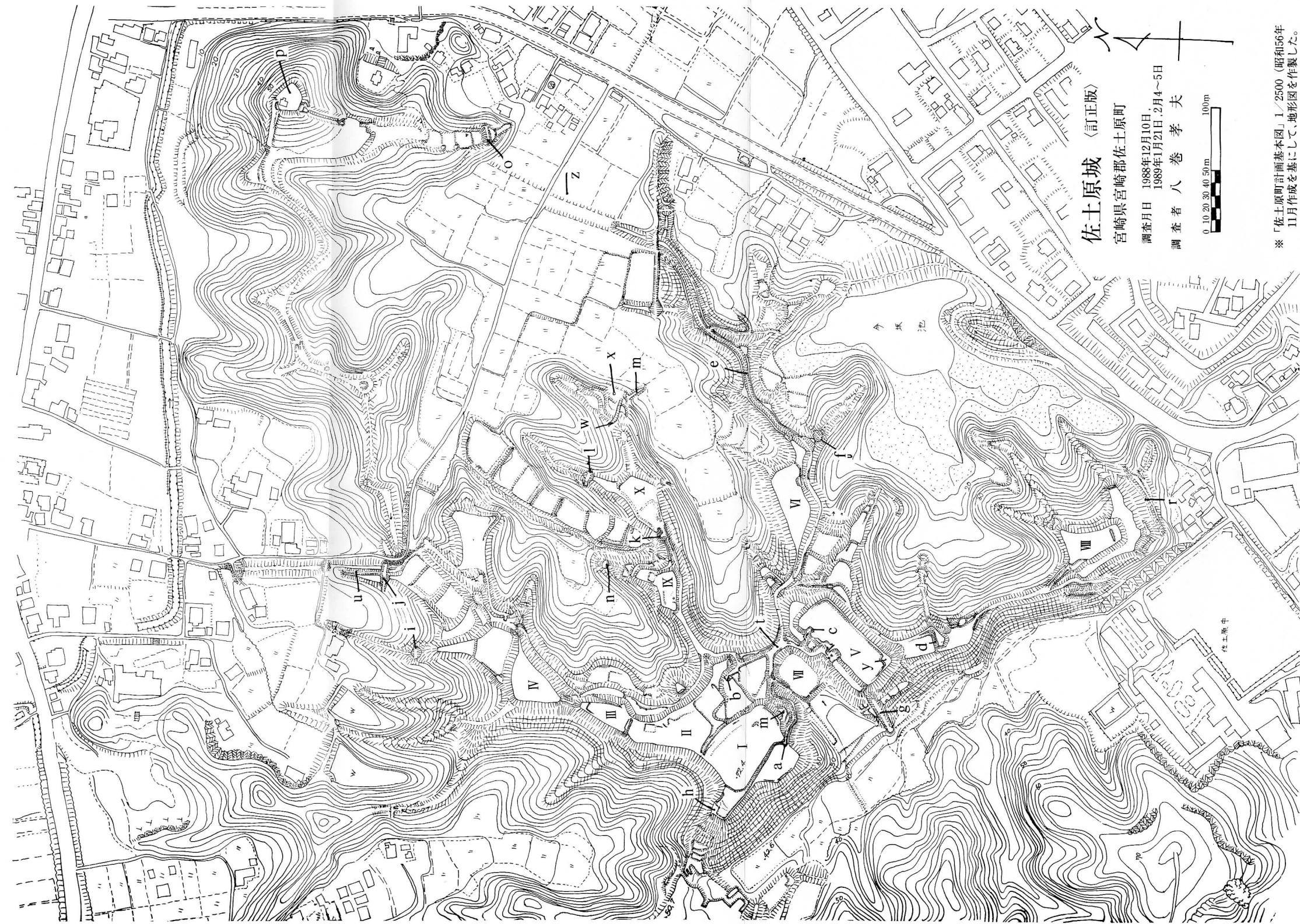
なお、山城部分の通路は水流でかなりえぐられているので、水の通る溝を作りその上を土などで被覆して歩きやすい道とすれば、これから充分通路として使えるのではないか。

その他、様々な保存方法、活用法が考えられるはずである。よりよい方法を模索していきたい。

付記……本稿は1989年の山城調査の点での緊急レポートである。本来その後の発掘調査結果や研究成果を含めて、改稿すべきであるが、種々の事情により、そのままとなつたことをお詫びしたい。

### 山城繩張り図

第3図



## 2 居館部第1次発掘調査 ---

### 1. 遺構

第1次調査で検出された主な遺構は、柱穴・建物遺構・井戸・石組暗渠・木組暗渠・瓦落ち遺構などである。今回は、それぞれの遺構についての説明は資料整理中のため次回にまわし、柱穴の建物調査における役割に触れてみる。したがって第4図遺構配置図は、素材の紹介にとどめる。

建物の根幹を成すものは、建築構造にも関連する柱穴である。当初は、地山面に穴を掘り柱をそのまま埋め込む掘立て柱型（模式図①）であった。瓦に伴う礎石は古代、中央の寺院や都城では、伝統的に用いられていた。（模式図③）その他の地方では、掘立て柱で屋根は板葺き、桧皮葺きであった。だがこれが地方に普及するのは、16世紀末でいわゆる織豊系以降の居城からである。模式図②は、時代・地域的な差があるいは、後世の開發で礎石が取り扱われたものであろう。

このように①②③のタイプが建築にどのようにかわるのかは、柱穴の遺物による時代分析作業とともに佐土原城の歴史復元には重要なポイントになるであろう。

### 2. 遺物

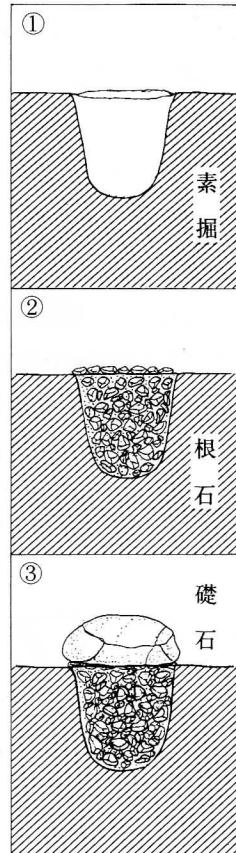
出土した主な遺物は、陶磁器・瓦・鉄器・銅錢である。特に柱穴や建物遺構からは、陶磁器が多く見つかった。時期幅は江戸初期から末である。今回はその中から一部の陶磁器類について述べる。

#### 皿（第5図・1）

京焼風陶器で、皿の内面中央に呉須絵（青）が施されている。17C後半～18C初頭。

法量復元推定・器高4.8cm・口径12.8cm・高台径5.7cm

#### 碗（第5図・2）



第4図 柱穴模式図

瀬戸・美濃の染付碗で、1820年代～1860年代のものである。

法量復元推定・器高6.3 cm・口径10.7cm・高台径4.2 cm

碗（第5図・3）

肥前系の染付碗で、高台の底部面にうず福文様がある。18C中ごろ～18C末。

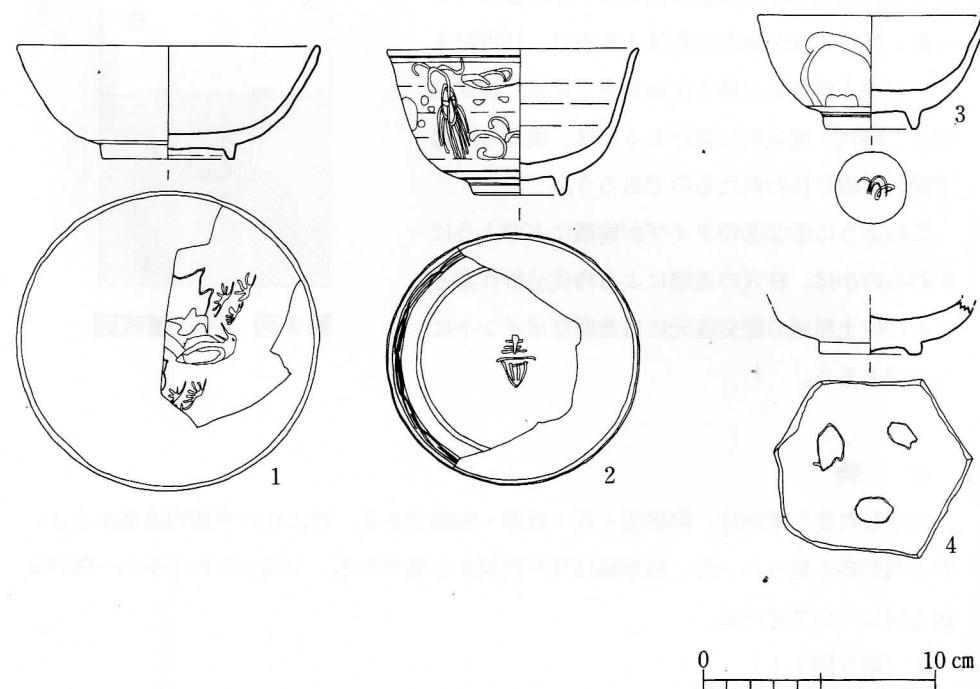
法量復元推定・器高4.9 cm・口径9.7 cm・高台径4.2 cm

皿（第5図・4）

肥前陶器で、灰釉を施している。内面中央は、砂目積跡。1600年～1630年代。

高台径4.4 cm

その他に薩摩焼の土瓶・肥前陶器の印花文・青磁の瓶・瓦・擂鉢（堺あるいは備前系）〔図版6〕・関西系陶器・縁釉・在地の陶器などから関西・佐賀・鹿児島あたりを中心とした交易や佐土原も含めた周辺地域の生産窯の存在も伺い知ることができる。また器種の豊富さからこの地が有力な消費地であったことも付け加えられよう。



第5図 第一次佐土原城址遺物実測図

### 3. まとめ

第1次調査は、城郭の居館部3000m<sup>2</sup>を実施した。その前の試掘段階では幅20m深さ2m前後の堀や建物遺構また堆積層位は、下位から南北朝期・室町・江戸期の三層に分かれていると推測できた。今回の調査では、最上位層の江戸期を行い、出土遺物から生活の起源は1600年とされ、終末は1860年代までと判明した。

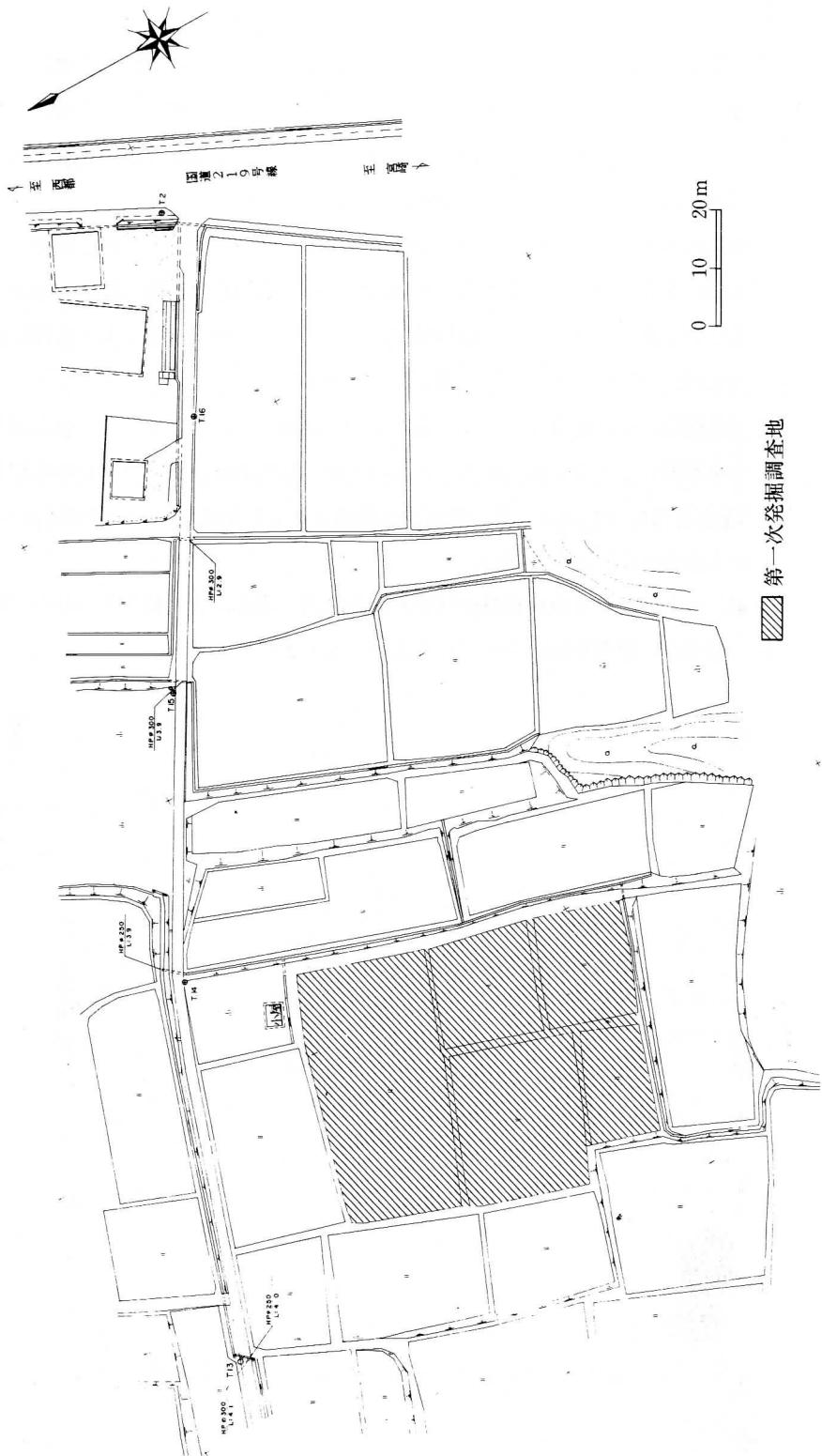
検出遺構も様々であるが、今後、城郭と居館部の関係で調査・研究を進めていく中で特に重要なのは、柱穴である。それは建物を造る場合の基礎になり、建物復元も柱穴に基づいて立ちあげていく。資料館建設も江戸所期の柱穴遺構によって行われる。建物の内容は、大広間・書院・数奇屋と推定される。

だが長期間に及ぶ使用中に、同一様式の建物、あるいは異なったタイプの建物の建て直しが当然実施されているであろう。この点は、柱穴から出土する遺物の時期と埋土状況(客土か自然堆積かによって、意図的に廃棄したものかどうかが予想できる)の整理・分析から始めなければならない。

将来、山上における遺構築造の時期が城郭遺構の発掘調査で解明された時、城郭全体の使い分けが、歴史空間の中に浮かびあがってくるであろう。

調査区設定図

第6図



佐土原城址遺構平面図（航空測量）



### 第 3 章

## 佐土原城址の活用

## 佐土原城址の活用

佐土原町合併30周年記念事業としてスタートした佐土原城址の公園整備並びに歴史資料館建設計画も、文化財保護の観点から「佐土原城址を学術的価値に鑑み、遺跡の現状を尊重する」という考え方修正しながら、文化財保護と公園計画との両立の調整を進めてきた。この結果、山城・平野部共に貴重な文化財であるとの認識を深め、格調の高い史跡として後世に残すことになった。また、その目的を達成するために、各分野の著名な先生方の指導を仰ぐ必要があり要綱を定め下記先生方を委員とする佐土原城址保存整備委員会を発足させた。

佐土原城址保存整備委員会委員名簿

氏 名	指導分野	所 属
野 口 逸三郎	文 献 史 学	宮崎県文化財保護審議会会长
北 野 隆	建 築 史 学	熊本大学教授
角 彬 壽	環 境 計 画 学	南九州大学助教授
八 卷 孝 夫	城 郭 研 究	中世城郭研究会幹事
日 高 正 晴	考 古 学	宮崎県文化財保護審議会委員

上記以外に

《国の機関》

- ・文化庁文化財調査官 服 部 英 雄 (史跡指定)
- ・奈良国立文化財研究所室長 高瀬 要一 (遺跡整備)

《県の機関》

- ・県 文 化 課 長 久 徳 菊 雄 (全般指導)

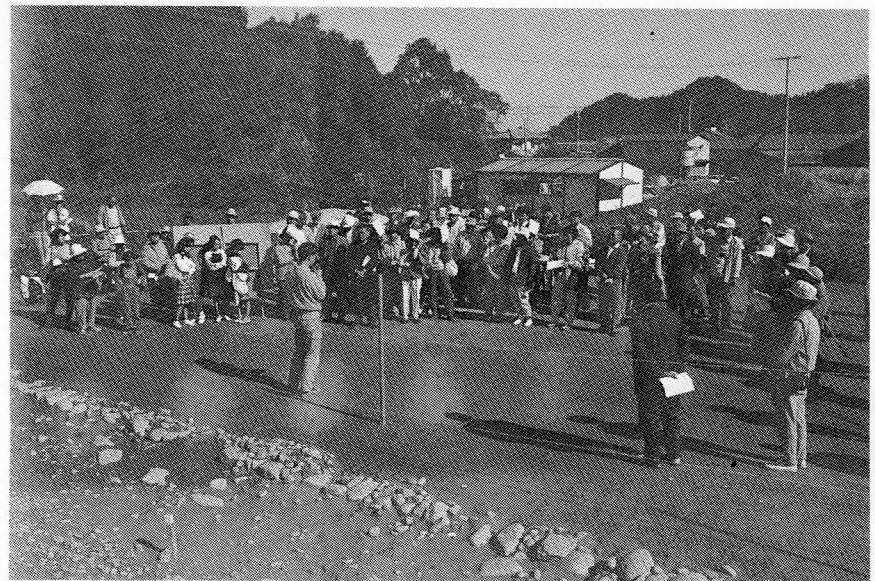
この会議は、佐土原城址公園整備計画に伴い、佐土原町が実施する整備予定地内の文化財保存整備事業を、円滑に進めることを目的としたもので、第1回会議は各先生方の専門分野において総合的に指導助言を受けることができた。

この中で、平野部と資料館建設については堀・上御門・下御門（約2,000m<sup>2</sup>）の早期着手、遺構を破壊することのないような資料館の建設及び遺構に沿った復元を考えての建設で平成3年度を目処に考えられたい旨、また、山城部については長期的な展望にたっての調査及び整備を進められたいとの指導を受けた。

町では、第2次発掘調査を開始するとともに、歴史資料館については北野隆委員に遺構に沿った居館の復元図を依頼し、この遺構の上に建っていたであろうと思われる居館を想像復元し、工法としては、地面の遺構を壊すことなく盛り土して出土した礎石のうえに寸分くるいなく柱を立て建築したいと考えている。

歴史資料館の展示内容としては「伊東氏」「島津氏」の時代を中心に展示したい。又、山城についても、登城道の整備、案内板の設置、ベンチなどの設置場所など、ここでも遺構を破壊しないよう十分な注意を払って整備していくたい。

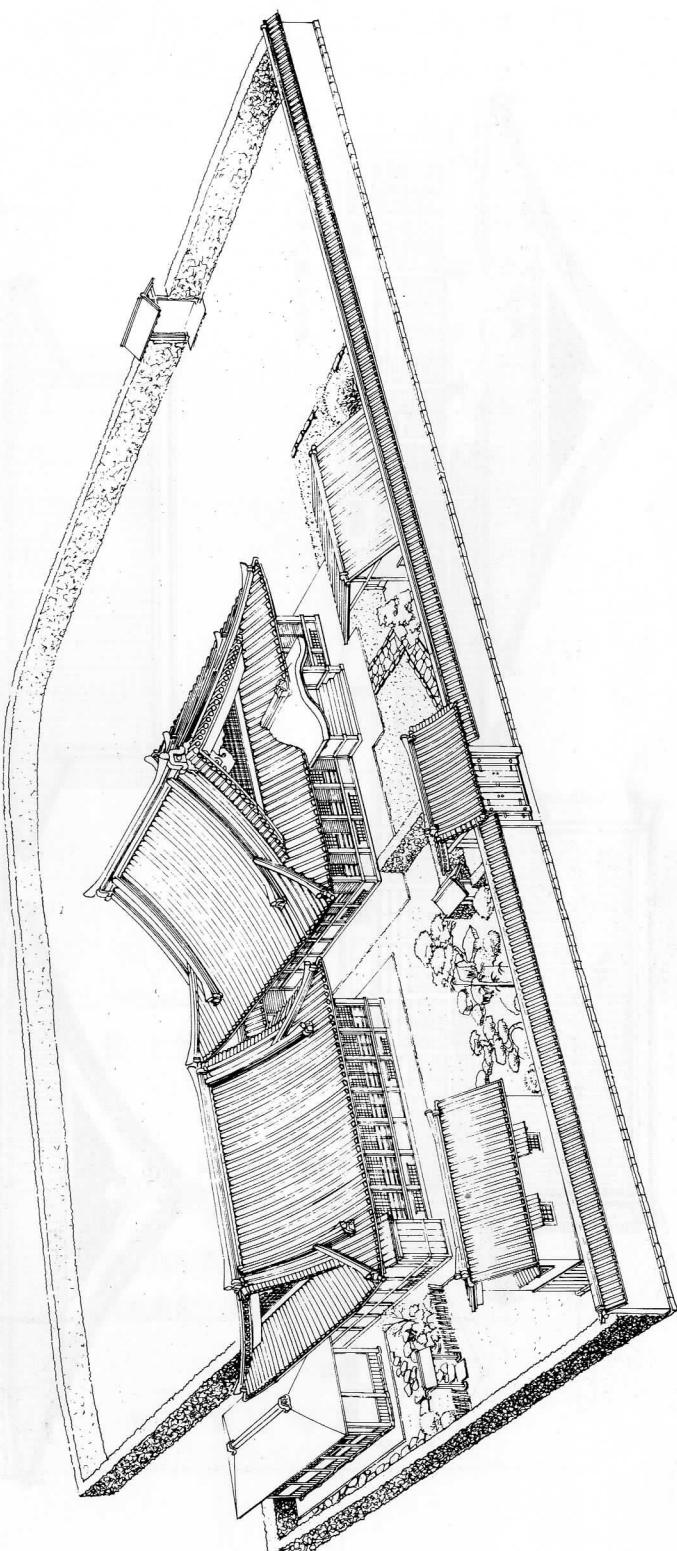
これから山城、平野部を含めた全体的な城址公園の基本整備構想については、上記、佐土原城址保存整備委員会のご指導を仰ぎながら、かつ町民の文化財に対するアンケート調査を行い、その趣意を十分生かした城址公園基本構想をつくり、発掘及び整備を進めながら住民の「心のよりどころとして誇れる佐土原城址」また、生涯学習の一環として「歴史と文化の学習の場」として活用したいと考えている。

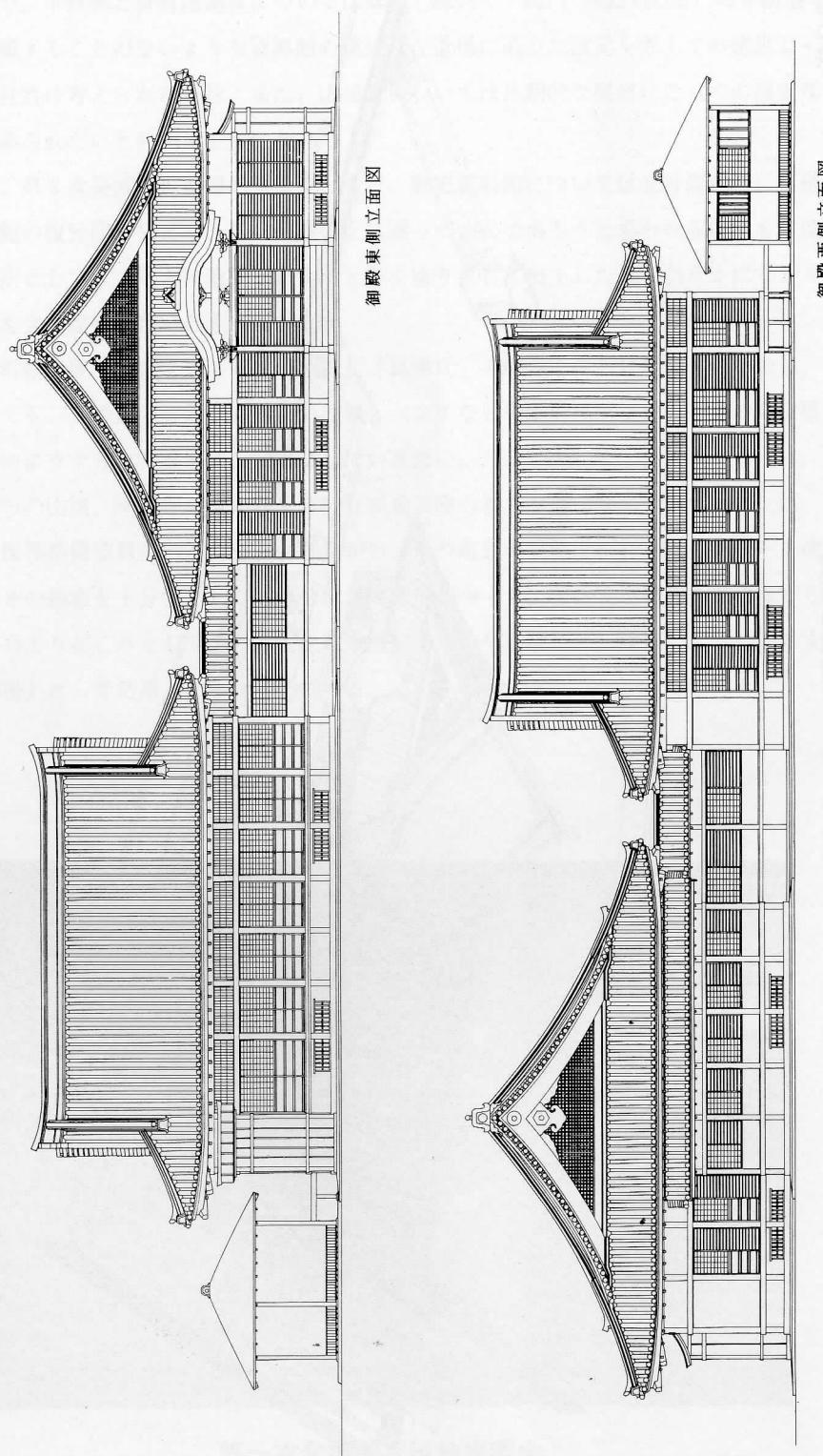


第1次発掘調査現地説明会

図  
第8

発掘遺構に基づく復元想像図





佐土原城址概要報告書

平成3年3月

編集・発行

佐土原町教育委員会

宮崎県佐土原町大字下田島20660

印 刷

富士マイクロ株式会社

